

坂好新機織



宗

宗





松坂縞好新機織賣出の口上

先以て稗史小説の類多愛讀の各位益々多機織能恐悦至極な奉 存候陳ハ這回賣出  
 しましたる松坂縞の藝又改進新聞の紙上へ織出し江湖の多聲價を蒙り既に談洲樓燕  
 枝々高坐お演をめてより一層縞柄の佳さを愛玉ひ是を纏めて一反物正札附で賣出し  
 てのと書肆のすゝめを幸ひに恰度仕入の三十二反を擇扱ました一疋もの糸と地合の  
 保護されとせし縞柄の紫濁らしきり織工の手が元來の不器用其うへ三益社の忙ハし  
 き爲め下織工委せの急仕入れ書肆が使を俟たせて置き此賣出しの口上を走り書する  
 程されハ多氣よ召さぬも多座りませうが其首ハ織工を引立てる氣で四季折々の多進  
 物また遠國への多土産物直段ハ精々勉強の定價此うへども多聲價をと書肆の主人  
 と合併の口上懇張て只 如件

干時明治十八稔八月一日新橋惣十郎町の寓居お於て

松坂縞の作者

彩霞園柳香述る















松坂綺好新機織

第一 一反

吉野山花咲ころの朝なく心よかふる翠のしら雲と佐川田舎六が詠じたる其れの大和路是れのみた吾妻に識られし隅田川の堤は沿ふて咲く花の一目千本三芳野に劣らぬ風情あり明より杖曳く人の雑沓を避けて風雅の詩歌俳句花を友とて愛るあれを酒あけて何んの己が櫻りあど樽と傾け路傍お酔ひ花と他處ある俗客あり各自隨意興に入る世も太平と立昇る民の籠も安らけき文久元年の彌生下旬牛屋の雁木もやひたる船の中より立出る男女交の花見連の一目よしるさ屋敷風中にも年の二九うらぬ侍女姿の一個の女は今日宿下りに父母が伴ひて來しものあるう堤の花を眺めながら行く一群を傍の茶店へ憩し男が打瞰遣り連の男へ密々話し(甲)熊、見や大層美女ちや無エの死んだ杜若のおりるを其儘といふ代呂物だせ(乙)民、汝那の代呂物をえらねエう那りやアソリテ割下水の評判娘サ(甲)フ、分つた中根の娘おはんたアあれか(乙)然ら(甲)成は悉素のお美しくし十聞けやア西丸へ上つて居ると聞いたが歸つて來るのか(乙)ナ、

松坂綺好新機織

一



其れの嘘の皮だ全体那の娘の實の母親が没去てうら父親の中根俊藏が棄育てよしたも  
のだから面は美くても我儘者で其れお今の母親のおいていふ元深川の娼妓脱り見  
やう見真似の浮氣を覺えアレ那の供をして行く若黨は那奴と疾ううら私通て珍々鴨で  
居るのを知らず繼母のおいていふまた其若黨の權三は惚れて口説て見たが四十面の娼妓  
脱りと手入らずのおはんと競ものふやアあら無エウら左右繼母とおはんの中が紛紜す  
るので近い頃まで親類へ預けられ二三日跡は仲が解け合ひ漸く屋敷へ歸つたのだが御  
殿者の姿は化け花見の遊びよ來たのだらうヨ(甲)其れぢやア那若黨がもう居るの  
か甘くやつたナ(乙)那のまた權三郎といふ野郎の元と越中様の御勘定方内海六郎と  
いふ人の二男だが男の好のが身の持て無エ原因で久保町の原へ出る巴勝といふ女義太  
夫に馴れ染め遂々其れが親父へ知れて勘當をされた其後に中根の屋敷へ若黨奉公評判  
娘の初物の味を占めたの果報を奴サ(甲)併し然ういふ様子で何うせへ今お騷動が持  
ち上るだらう(乙)何しろ娘の權三の宜喰物もあるの別れサ、オヤ最う午刻の今  
朝の酒が大分發したぜ(甲)何處で一杯飲み直し今夜ア再度と出のけやう(乙)然して

また朝歸りよ朝櫻の(甲)氣樂を云ふせハ、ハ、と笑ひながらお茶代と置さ打連れ立  
つて行く跡お前刻より始終の話と素知らぬ振よて聞居たる商人風の一つの男が屏所を  
立出てホツと息吻さ「原來ハ中根のお嬢さんハ那の權三どのと構て居たか人の見うけ  
よよらぬ者ぢやナア

第二 反

東海道小田原驛の中央お相摸屋太兵衛といふ旅舎あり开が奥坐敷をうりそめの病病よ  
臥したる旅人の男の近時漸次よ重体ありしを妻とも見ゆる年若の婦人が信ある介抱よ  
男いやとら枕を擡げ(權)モシお半さ今更いふて返りませぬと誰わらう中根様といふ  
御旗本のお嬢様をば教唆し連れて遁げたる不義のみか刺さへ且那様の御手許金を盗み  
出し江戸を立退き京坂筋へ目的なき旅は旅費も盡さ漸々の事よて常驛まで歸りまし  
たが不圖私しご患ひつき昨日今日で湯水だに咽喉へ通らぬ苦痛の惱み是れと申すも  
御主人へ不忠の罰で御坐りませう何うせ私しは苦み死よをするのが當然誰を怨とも思  
ひませぬうら貴嬢の今より江戸表へお歸りおされ御親類方を頼み父公様へお詫をさ



松坂清子新装



茶宗

松坂清子新装





れて御約束わりし御先手組の高濱の御二男正之助様を御迎のうへ御夫婦中よく親公  
 様へ御孝行を遊ばしますが肝腎只何事も是までの事の夢と思ふて下さいませ願慮せ  
 妻と呼び長夫と稱われし恐ろしき無親公様の權三郎とお怨あるで御坐りませう其れ  
 を思へば片時も貴嬢を此處に置ましての未來の罪も彌よ重し此の道理を聞き分けてお  
 歸府おされて下さいませと云ふ聲さへも息ぎれて惱み苦しむ權三郎の顔情々と打臆望  
 お半の落る涙を揮ひ(半)アレ亦其様事云つて妾に苦勞を増さすのの不義した罪の互  
 の事假令如何様も艱難をするとも一旦想ひ想ひれて末の夫婦と言替し人目の關を  
 ながら恐び逢ふたも度々よて屋敷を抜け出で他國へ趨り苦勞をしても夫婦ぞと云われ  
 る事を樂しみお送る旅寐は生憎とお前が病氣も漸次重り醫者様のお話にての所詮高金  
 な藥を用ゐねば全快をせぬとの事滞はつたる藥禮と拂ひもせず高金を藥も貸て下さ  
 いと何うも厚皮おの云ひ兼て只あつて貯への金いなし金があければお前の病氣を全快  
 させる事が出来ねば苦しい悲しい憂目を忍び妾の漸と其金を調へたゆめ今日明日より  
 お前へ藥を服せやうと思ふて居るよ江戸の屋敷へ歸れとい其りや胸慙ぢや不束者の妾

あれが氣お適ぬか知らねども見棄す妻よ良人と呼ばれ一生添ふて下さいと泣聲他に  
 洩らさじと咳も紛らす御言權三郎の駭らさて(權)決して氣お適らぬの厭だのと其様を  
 不實を氣のムりませぬが醫者の噂は高金を藥でなくば瘡らぬと聞きまじたゆめ今の身  
 での所詮出来あい相談と心に諦め死を候つ權三其れゆる貴嬢へ御意見申し江戸のお邸  
 へお歸りあると様よと勧めました然うして貴嬢が其金を調へたと如何いふ譯で  
 ど云ふ折のら又障子の外より(久)イヤ其金の出来た譯にお半さん又代つて私と話しや  
 せうと入り来る顔を權三の暇遣り(權)チ、お前の判人の久瀧さん金の出来たる其譯を  
 知つて居ると云いつしやるが其れでん若やお半の身を賣り(久)モシ權三さんお前が然  
 う推量するうへに別に詳細話のせぬがお前の病氣と癒一度と私へ身賣の相談ゆる一旦  
 の禁めて見たれど私が承知を知ねえなら他の判人へ頼むとの事私も常相摸屋とい知己  
 まで度々出入る其うちよお前さんとも懇意おなり様子も知つて居る事だうら失禮な事  
 をいふやうだが同じ身賣をするよ云つても少しでもお前の手許へ餘計お金お渡し度他  
 の判人へとまで決心したお半さんの了簡ゆるお前お私くら其伍什を話す積りで實の



驛の海老屋へ賣込み昨日日本人の目見も濟んで樓主へ委細をたのんだらへ前借をした三十兩ッレ此通り持つて来た又跡金の二十兩の本人と引替よる管だコレ權三さん濟むの濟まぬといふ以前の事だ斯うあつた後互に實意の第一お前の身体せへ壯健よあつたなら如何とも身購のある事だうら堅い屋敷の口調を廢め諾と云ふ方が宜うらうせ(權)段々様子を承たまひ何んと申して宜うらうやらモンお半さま此御恩ハ決して忘れませぬ(半)アレまだ依然主待遇其れでい妾も心々濟まぬ何卒昨日までも今朝までも互と呼んだ夫婦中と思ふて禮に及びませぬ(久)サア斯う六段目が速か又行くと一文字屋といふ役廻りの此久藏も大安心また日和の變らぬうち是れから直ぐに連れて行くらお半さんサア來させへ(半)ハイ參る事ハ參りますがコレ權三郎さん早う藥を服で全癒し嬉しい顔を見せて下さいませヨ(權)氣遣ひしやんる壯健よあつたら直ぐお迎ひも行うらうら隨身體を大事おして(久)ハテ長居をしちやア幕がされ無エ遠方でありし驛内だ跡の私が引受けるら濡りを廢して行くべし行くべしとお半の手を把り立上り海老屋を投して連れ行きし後影をば見送る權三三十兩の金を手に把り(權)ア、毎見

ても悪く無エナアと俄變る容体の仔細あり氣お思ひれたり

第三 反

繁き白晝の往來よ替へ淋しき夜の暇道月のあれども雨もよひ風さへつけて岸よ寄る浪音わらき鶴見の並木來蒐る一個の監兇兒が前後見廻し獨り言(權)秋の夜風が身よ染みて滅法寒くあつて来たが懷中よ温けへ金せへありやア苦勞もチエが中根の娘を連れ出して京坂筋をば見物し小田原驛よ泊つた夜から少しの病痾を大層よ枕に就いて浮んだ狂言以前内海の若旦那と呼ばれた時分お屋敷で使つた那の仲間の久藏が判人渡世で小田原よ居るを幸へ抱き込んで醫者と謀つてお半をば海老屋へ賣つた五十兩の金を握つて隨徳寺神奈川臺に遊ぶうち野張の勝負よ手を出してまた八兩の十兩しう面白い目あひねえうち悉皆取られて仕舞たのの諺にいふ悪銭の身よつりねエタア此事の野張で取られる位から久藏や數醫者へ分配をやつたら最う二層宜狂言があつたのも知れ無エ併悔んだ處の死んだ子の年其マア愚痴の廢した處で野張の胴の足を借り三杯三杯重なつたゆゑ何うせへ長居の出來ぬと思ひ江戸へ歸つて稼ぐらうと出掛けて来たが一文をし



如何する事も並木原是れでも元の立派を武士小柄一本持た無エけれど然たア覺えの柔術の手を役立て宜鳥をバえめて路費が欲しいものだと言折くら向ふより怒る悪徒の居るぞとの白張ならぬ山形に太の字を書せし小田原提灯廻し合羽ふ三度笠飛脚と見へて足疾上る姿と見るよりも權三郎の心よ點頭屏所忍び窺ふうち飛脚の夜風よ灯を消さすと合羽の下よ覆ひ行けば傍邊は權三郎の在るを知らず通り過ぎんとする處を突と顯れ出で笠に手をかけ引寄せしにぞ飛脚の駭き手よ持つ提灯取り落せばつと燃立つ火影に見定め權三郎の手疾くも綜をのけたる手拭を飛脚の首に纏ふと見ぬしが曳と聲かけ力よまのせグツト締むれば苦とばかり手足を悶き四苦八苦鼻と口より夥だしく血を吐きながら息絶れば莞爾笑ふて呼吸を窺ひ手を放せばつたりと仆るゝ死骸に乗りより懷裏搜して取り出す胴笥(權)此重量ぢやア少なくなるとも四五十兩ある様だ是れだけありやア當分のまづ樂々と遊ばれやう然し這奴も飛んだ處へ引つうつたのい憫然な奴だが定めて是も前生で斯んを手舞を料理をした報と思つて往生しろと言つゝ空を打ち眺め(權)オヤ大層聞くあつて来た川崎まで降らよやア宜が

第四反

今(春)脚けて新橋も南と北の幾筋に軒を列ねて掲ぐれ昔の最どまばらなる藝妓が家の縁喜提灯金春板新道の中央よ三春屋春吉と筆太お記した家の格子を開け入来る男の先頃より該家の藝妓を愛顧で呼ぶ外川竹醉といふ京都の書工(竹)姉さん今日のお宅ある(春)オヤこれの先生能く入らつしやいました一昨晩の有難う昨晩も来ると仰しやいしましたら大層お待ちしてをりましたが他處か他へ御遊興でもあつたと見え遂々待ち損を致しました(竹)甘く云ふせ来ないので大仕合だらう、時は是れから賣茶へ行くら一緒に來るせ(春)有難うお供致しませうと云ひつゝ傍の火鉢の本よ坐したる男に打向ひモン兄さん妻の先生のお供をして行からお前時刻云つた事を信と頼む(政)宜し承知をした、エー先生私しの政五郎と申して春吉が兄で針商ひを致すもれで御座いますとが毎々妹を御愛顧お御引立て有難う御座います(竹)原來の春吉さんの兄公か兼々噂聞てをりました、ナニ春吉さん如何だへ兄公も開からバ一緒にけううぢやあいう(春)其れの有難うムり升其れぢやア兄さんお供をおしおネ(政)如何も夫れの恐れ入り





外川竹醉賣茶亭よ  
画を所望さるゝの圖



芳  
宗



ますが平生妹の話しまするよの先生の御書い實は美事だと承まのりましたのらお供を致して何かお揮毫物を一枚頂戴致し度もので御座います(竹)否々其様おに賞賛られるやうな書でいふらぬ左右く直ぐに行きませうと是れより三個の連れ立ち久保町なる賣茶亭に赴き二階坐敷で献酬數盃暫時酒宴を催せしや馳て竹酔り政五郎の需は應じ二三葉の畫を認めて與へしと情々眺て押戴き(政)成るほど私しの様な畫心のあひ者が見ましても何んとあく感服を致しますが先生の未だ暫時江戸に御滞留で御座いますか(竹)左様サ先二三年の留る積り其間に近國近在と廻つて見やうと思ひます(政)然ういふ思召あらモシ先生私しが以前からの華主信州松本在の豪農伴太左衛門様といふ方頗る書畫をお好きされ遊歴をする先生方の努す吾家へ留て置き風雅の友とあされますが近時の其相人又乏しいから設し漫遊でもする人があるなら伴て來いとこの事ですが何んと先生些と寒空又向ひて氣も乗りませぬが何うせ江戸に御滞留おされさ處が冬分のお閑勝ゆる寧私しと一緒お信州へお出りけるよりの如何です(竹)イヤ其れは恰好幸ひ不案内の土地へ一個で出かけるよりのお前が往くから同伴して暫く遊んで春長おあ

つたら歸京とする致ませせう(春)眞個に兄さんも先生と一緒にお出でなら妾も安心だヨ(竹)然うしてお前の何日お立ちの(政)へイ明日日出立をしやうと思ひますが先生の御都合よて一日や二日の延ばしにしても宜しう御座います(竹)何んのく別は用事もあひ身だのら明日一緒お立つとませせう(政)其れで私しは明日午頃から春吉の宅でお待申しませう(竹)何卒然うして下さい其頃までよの信と出うけますと承知の辞を聞くよりも春吉政五郎の兩人の顔見合せて片頬は笑み(春)其れぢやア先生お爛の熱いので今夜の少しお過しおさいませ

第五反

小春といへど嶺の早はつ雪の降りそめて化粧なすなる碓氷峠夜深き路も月未だ樹々の梢も高くすみ溪間も響く鳥の聲さへいと物凄し茲へ來越る兩個の畫工竹酔と春吉の兄針商人の政五郎あり(政)先生飛んだ粗忽を致しやしう何んでも今朝の早立ちで此峠を踏さうと思ひ宵啼きをした鶏を拂曉と思つてお起し申し嘸御寒ういませう(竹)否々別に寒いと思ひねと名も聞いて居た碓氷峠只何んとあく凄いゆる氣味の



悪い心地がまます(政)ナアニ大丈夫でムいませす夜の往來がよいもせよ晝の途絶ぬ街  
 道筋非除飛出すものがあつても兎り狸位のものです、モシ先生何んと宜月ていふい  
 ませんか(竹)成るほど秋の餘波ともいふべき月の風情ゆり此真景を眺るといふの早  
 立ちをして來た故り時刻の間違ひ過ちの功名私しの爲めよ結構を本でムると墨壺  
 を取り出し月明りを便り又寫すも渡世柄餘念なければ政五郎の前後見廻し懷裏より準  
 備の七首把り出さし夜目又閃く白刃をぬつと竹醉の前又突き出だせば此方の顔を打  
 遣り(竹)コレ政五郎の喫驚した危いから其様を申成の慶しきさい(政)喧しい静よし  
 スコリヤ竹醉汝ア此政五郎様を凡の人だと思つて居るう外部の細い針商人と堅い地金  
 觸れ込んでも性根の太へ曲り金甲州無宿の三五郎といふ幾個あつても首の足り無エ  
 刑狀持の盜賊だ、末の夫婦と約束の那の春吉を妹に仕立て從來多くの客の釣つたが  
 漸く五兩十兩の端金ゆゑ身につかず殊もやア近時己といふ悪足のある藝妓だと噂が  
 立つて宜鳥もろくろぬ折から舞込んだり上方畫師の外川竹醉何んでも肌にはやア百と二  
 百の帯した金を持つて居るが育ちが客を野郎丈けに色氣で持ちかけ搜つても容易に喰

はぬ据膳の確は然うと春吉から聞き込んだゆる素直でい油断をしめへと旅旅を勧め  
 て信濃へ連れ出したも此で殺してまふ了簡金せへ出せやア命丈けの助けてやると云  
 ひ度で助けてやつちやア此方の身にうゑる事も憫然あからも確氷峠の薄い命と諦め  
 臨終の念佛でも唱へて往生するがいゝ尻引き捲り嚇しくくれバ駭きもせず竹醉の傍  
 の石に腰打ちけ煙す煙草の空囀(竹)はじめて逢つゝ其時から些たア咄せる仲間たら  
 うと思つたゆゑも勤めも乗り寒空向いて信州へ稼に出たも胸の一物己が所持する金高  
 を百と二百と云ふせへあるに白痴感もある小刀を眼前へ突き出し寝の足らぬエ囁言を  
 列べて居る處の甲州無宿の三五郎と大した兄いと思ひぬ唐變木の益暗だナ(政)如  
 何したと(竹)オイ三五郎己を畫師と見る眼ぢや未だ宜仕事やアウレ無エ素人欺  
 しよ京都畫師と柔弱な姿も化けちやア居れど水道の水で産湯と浴び立派に両刀佩せる  
 身を酒と女で持崩し親父の許を勘當うけ大名邸旗本へ徒士若黨の流れ渡り娘を櫻つ  
 て亡命し賣婦にしたる結局の強盜から人殺しと今い五尺の此驅幹と置き所の無エ浮  
 浪人内海權三といふ者だ協議をすりやア宜仕事に乗つて此の世を太く短かくコレ三五



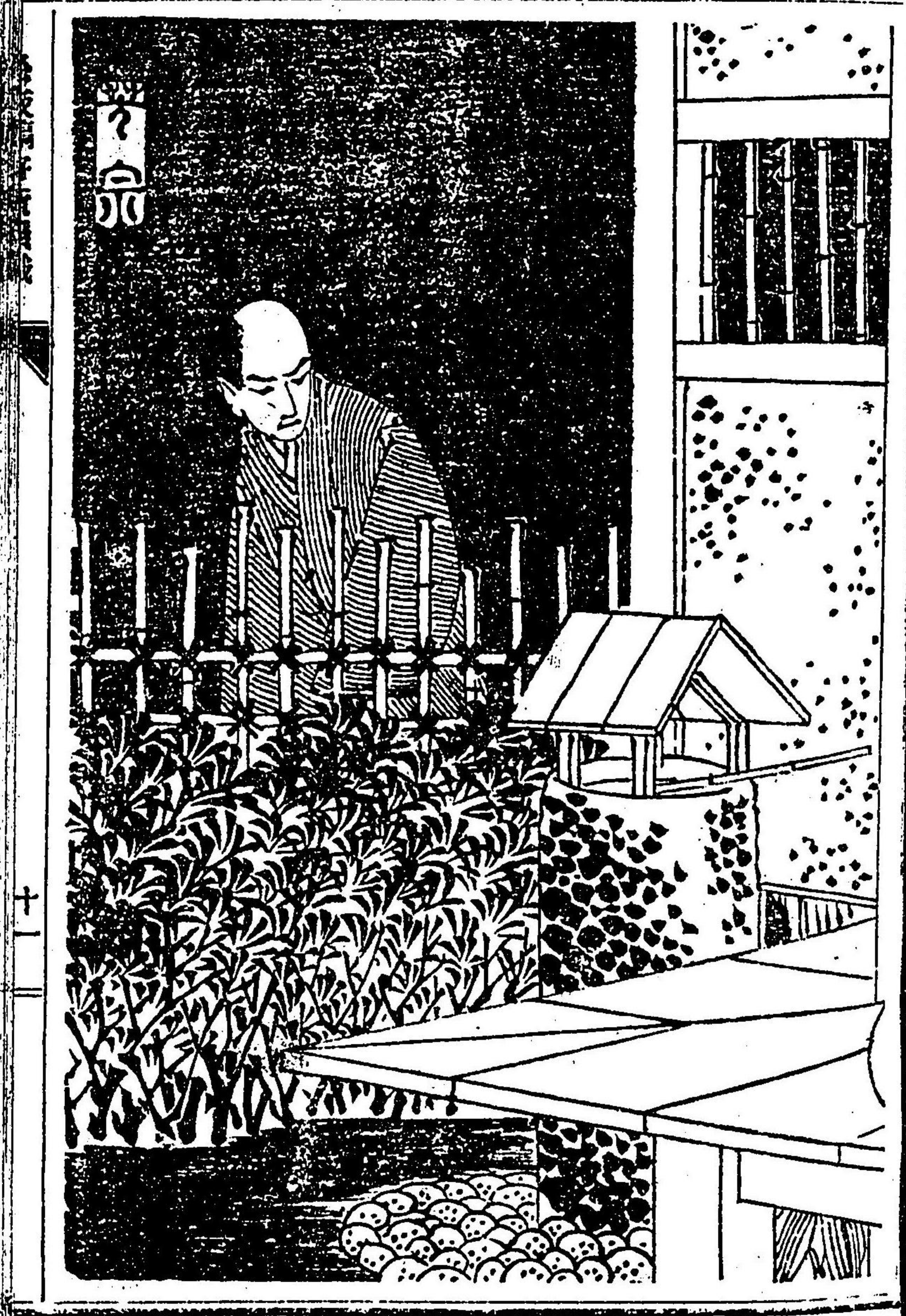
郎年の己より上の様だが見違るゝア若へせ〜と思ひ掛けあき竹酔の産胸了得の三五郎も突出だしたる白刃の手前手持ら無沙汰見えたりけり

第六反

單表信州松本在 某村は伴太左衛門と云ふ農民あり豪富といふよりあらねども近郷よてい人に識られ何不足なき身なりしが妻おきんの太左衛門が三十六歳の春九歳ある太一郎といふ一子を遺し病死し暫く無妻で居たりしされと不惑といふ年あがら未だ老人といふでもなければ聞淋しき心地せらるゝより松本の町は藝妓渡世をせしお京と云へる婦人を呼迎へて妾とせしと斯る勤めをしたるに似氣なく主個太左衛門へ信切仕へ且太一郎を愛する事宛然實子の如くあるゆる召使の者より更なり出入の者の人望もよく最と睦ましく暮し居たり頃及文久元年十月下旬土個太左衛門が氣あ入りの針商人甲州屋政五郎が江戸より來たり京都より漫遊の外川竹酔といふ畫工を伴ひしよぞ主個の大いふ欣びて早速裏隠居所へ同人を住らせ政五郎の母屋に留め置き家事と手傳はせ好めお道とて竹酔を二なり友とて款待しひる該兩人こそ前記せし内海權三と甲州

無宿三五郎あり恰も虎の野に放ち狼を抱くも比しけれと胸一物ある兩個の皮相を粧ふ正直振を知らねば渾家も誰あつて兇漢ありとい知らざりけり爾るが中よも妾お京の竹酔が醫書の術のみり遊藝の道おもくらのらで折々酒席の興を添ゆる男ぶりあり容子あり土地に得難き人ありと思ひ染めたる痴情の迷ひの一旦染みし泥水の索性を顯すものなるう早晩心のたけを云ひ寄りしよ男の素より渡りよ船太左衛門の眼を忍びつづ密會なすも屢けれと渾家の者より更に知らせ然れども三五郎の疾くより識り或日内海へ道へる様(二)碓氷峠で約束して富家へ乗り込み尻を据たも雪解をまちて一仕事大きくやつて出る積りごがお前の甘く那の女を手よ入れるたア如何しても己より上の敵役だ併しうつり互の素性ボロを出しちやアいけ無エセ(權)お前よ知ちやア面目無エガ誇らモタ〜されたゆる据鷹喫のぬい何んとやらツイ一箸と手をつけたが何處まで往つても書師の竹酔其心配よア及ば無エ然うして大体見込みがついたか(三)土藏其他の見込みをつけたが未だ肝腎の金の所在夫れむつかりの分ら無エガお前の那の妾を抱たこそ幸へ諺言いふ毒喫ハ血手を濡らさすといふ脚色を一番演る氣のあくらうり







(權)フム然して甘へ狂言たア(三)オイ耳を假しねエ、ナア、宜か(權)フム成るはど其れ  
ぢやア萬事お前に頼むぜ(三)案じおさんな細工の粒々仕上を御覽トと囁き合て兩人の  
奥と表へ別れ行く

第七 反

飼狗も手を噛るゝどの夢えら雪を踏み分けて山から山へ狩倉の太左衛門の連れ來たり  
し一子太一郎又打向ひ(太)今朝の空あひでの太分獲物もあらうと思つたが此雪では格  
別な事もあるまい最う一巡りして歸るとしやう然うして武助の何處へ往つたか(太一)  
先刻向ふの溪間又良獲物あり想だど申して黒を連れて参りました(太)何んの那邊よ  
何が居やうぞ止せよいよ其れで戻るまで一煙して待たう(太一)モ、涉親父さま未  
だ幼年の私しが斯様な事を申しまするも小瀬お奴とお阿賣も有りませうが昨年以來江  
戸のら來て滞留をして居られまする那の外川先生の早くお拒絶なさるが宜う御座りま  
そ(太)是れは悴としゝ事が怪しめる事を申すま竹醉どの其方の爲めは書畫素讀の教  
師であいか何故左様な事と申すのぢや(太一)何故と申して別段は先生の事を議論する

譯でもありませぬと皮相も見えぬ人心那の先生も京都とかの人よて素性も育も正可よ  
賤しい方でのありますすまいが連れて参つた針商人の確と身元も知れぬ者其様お者の周  
旋ゆる安心として留めてお置きなさるゝ如何も間違の原因と思ひますから從來私しが  
教をうけました相當の禮をお遣りあされて止宿をお断りなされませ(太)如何さま年端  
の往かぬ其方が心で然う思ふも道理だが那の針商人の江戸金春の藝妓春吉といふ者  
の兄よて前年俺が出府をした時春吉も面會し身許の確よ知つて居るまた那の竹醉ど  
の其春吉の客よて漫遊 旁當國へ來た人おれは何も間違のあり想な事のない殊に未  
だ三十未滿おれと其方へ教授の深切な事私も感心をするはゆゑ必ずしもよ心配に  
な及ばぬぞと父の辭よ太一郎の薄々知つたる竹醉とお京の中云々と緯明白よ告やう  
かと口まで出でなされたれども説も告げなば噪とあり妾との云へは眞實の母よ比しく愛  
みをうけたる人の難儀とある事只何となく竹醉の舎を拒絶する外にかければ今日よ限ら  
ず亦明日にも機を見合せ父親へ意見をせんと思ふにぞ押返して云ひもせざれば心裏  
の苦勞の面よ現れ愁を含めば太左衛門(太)獲物おあれは雪中が反て獵よの面白けれど



兎一頭手に入らねば何んたり寒さが身は染み未だ日の高いが徐々と涉獵ながら歸るとまやう(太一)其れが宜しう御座ります今日の遊獵の何んとやら私しも氣ますみませぬから武助の歸りを俟ちましてお歸りなされると致しませう(太一)アレく武助も獲物を見當らぬと見ぬ黒を連れて歸つて來るサア出かけやうと親子連れ語合ひつゝ行空も未だ如月の肌寒く殘んの雪の解けやらねと早綻びし梅が香み興を助けて行く折りら何處よりの飛び來る彈丸轟と響いて太左衛門の胸下深く射貫きしみを突か堪まらむ苦とばかり叫べば忽ち進しる血汐ととも握と仆れし此景態に太一郎の仰天あして起りつぎ(太一)御親父さま氣を確よおもちあさいませ御親父さまくと聲とはうりに呼びいける此景態を見るよりも駈來る武助も取絶り(武)是れの大變流れ丸でもあるかモシ旦那様—旦那様—

第八反

主個太左衛門の山獵の戻り道よて何者にか鉄砲を射のけられ非業の死を遂げ還るの一人子太一郎と妾お京の其外四五人の奴婢と伴の竹醉政五郎兩人あり爾れは森婦の今

しも憚る所なきまよよは權三を己が臥房より引き入れ女房氣振りのさうめ言(京)實は縁の異なるものでお前さんが該家へお出であされた時みら染々惚れの惚れさもの田舎育ちの紫痴を妾が其様事をつ云ひ出して笑られるのも愧のしいと思つて居るうち心の念が届いた事やら斯ういふ中よあつての濟まぬ事ながら旦那がなくばと大それた尋思の起るも戀の道其旦那のまた思ひがけあう山で横死をさせられたゆゑ今誰よも憚らず此の樂みするものゝ年こそ往うね太一郎は死なれた旦那の様でなく萬事は抜け目のない丈けは疾うから兩人の其中を知つて居るのう他事に比喩てお前を江戸へ歸せと頼に妾へ意見をするが万一飯田の宗家へでも知らせをすると兩人が身のうへ其首で妾が思ふにの寧親類のら彼是を云ひないうち妾の方より暇とつてお前と兩人世帯を持とらと尋思を極めたがお前の定めて當坐の花ゆる其様な心のありませぬ(權)當坐の花か眞實り能く考へても見るがいと當地へ來てのら世話にあら其思人の太左衛門どの妾と密通するのみか晝の目目があるゆゑにお京さんとう先生とう辭遣ひも更まれと夜るの斯して一夜袋ニツ枕の夫婦も同然死なれた主個へ濟まぬ義理と思つて居れと願



惱の犬も追ひぬるゝ心の迷ひ過般のら太一郎が如何やら様子か訝しいと己も心も注いで居るのら所詮は長居も出来ぬ己の明日にも前へ立ちお前が故郷と聞いて居る美濃の岐阜にて待ち會せ江湖へはれた夫婦となり苦勞を俱にする了簡さ(京)然ういふお前が決心から妾も嬉しう思ひます然うして岐阜で落合ふ所(權)那の政五郎が懇意と



聞いた武藏屋彌七といふ小門物商へ己の憑つて行く筈あればお前の跡くら政五郎と一緒に來れば案トのあい(京)成るほど然うなれば妾も安心明日の早速親類へ暇の事を云つてやりませう併し考へれば只氣の毒あり旦那様(權)オヤ、俄も戀しくなつたと見ぬ大層戀ははじめたる(京)否々決して然うぢやありません妾も長年世話あつた人で



すから何處の何奴が殺したうとツヒ氣の毒もありますのサ(權)ム、其れぢやア太左衛門どのを殺し、奴が聞き度のかお前も密通をするほどの度胸でもない其の仇を知らぬとい餘つばど佛様だナア(京)其れでは殺した奴の知れてをりまどか(權)知れてゐるも何よりも別人でいさい此竹醉だ(京)エ、(權)成るほど喫驚の道理だがお前と深くなつてゐらぬ那の太左衛門さへないからば誰憚らず逢ひれやうと思つた戀の悶雲も獵とすゝめて出してやり先へ廻つて歸りを埃ち伏せ只一發も射ち留めたるお前と夫婦にあり度ばあり併し斯う名乗るうへうらぬ旦那の雛の此の竹醉太一郎へも知らせてやり仇を討たうといふ事あら立派に切られて死ぬ覺期定めて腹も立つたらうが最う斯うあつていお前の胸で私を殺さうと生さうと尋思次第又まうせるから如何とも勝手あするが宜いと始て明りす竹醉が非道の所爲より了得の姦婦も駭くより外ありしが尋思を定め莞爾笑み(京)お前が旦那を殺したとい實お今まで知らあかつたが其れはどまでも妾の事を思つてお呉れの信實男何んで怨も思ひませう素より良人といふのでいあし金で買はれて厭々あがら枕の御をした計り白髪交りよ引替て若いお前と夫婦あある其樂みよ

やア替られさいよと再も寄り添ふ夜衾の裏如何なる夢とか結ぶらん既よ其夜も丑滿過ぎ便所お行くと臥床を出でしお京の櫛の障子を明け歩行柏子よさつと吹き來る風よ手燭の灯の消え黑白も分ぬ中あるよ向ふへスツクと立つたる男へ今は世よあき太左衛門々狩倉をありくと宛も怨しげよ白眼詰めお京が身置へ寄りかゝる其怖しさよ吾を忘れて苦と一智氣絶をせし物音聞つけ眼覺す權三(權)お京か如何した、何んぞ簀を被ふつて其様な處よ寐る奴があるものかサア起あよ起あよオヤこりや目を廻して居らア如何したのだく

第九 反

明治の後の跡さへあけれど文久年間の頃い最と盛りし濃州岐阜の明地よ在る菅蒲樓と呼べる娼舖の京都より容貌よき婦人數多を連れ來て遊女となし客を曳く其釣畏よ嵌り來る客さへ最と多かる中よ該舖でお職の名を賣りし綾衣の許へ屢々通ふ嫖客の内海の權三郎なり今朝も其儘流連よ宿醉腹を癒さんとまた飲みはじめ居る處へ若い者よ案内をさせズツト這入るの三五郎(三)是りやア毎よ無エ大層早いナ(權)オ、大哥かサア



すから何處の何奴が殺したうとツヒ氣の毒もありますのサ(權)ム、其れぢやア太左衛門どのを殺した奴が聞き度のかお前も密通をするほどの度胸でも其の仇を知らぬとい餘つばと佛様だナア(京)其れでは殺した奴の知れてをりまどか(權)知れてゐるも何よも別人でいさい此竹醉だ(京)エ、(權)成るほど歐齋の道理だがお前と深くなつてゐらぬ那の太左衛門さへないからば誰憚らず逢ひれやうと思つた戀の悶雲は獵とすゝめて出してやり先へ廻つて歸りを埃ち伏せ只一發も射ち留めたるお前と夫婦にあり度ばあり併し斯う名乗るうへうらぬ旦那の鎌の此の竹醉太一郎へも知らせてやり仇を討たうといふ事あら立派に切られて死ぬ覺期定めて腹も立つたらうが最う斯うあつていお前の胸で私を殺さうと生さうと尋思次第まうせるから如何とも勝手するが宜いと始て明りす竹醉が非道の所爲了得の姦婦も駭くより外ありしが尋思を定め莞爾笑み(京)お前が旦那を殺したとい實今まで知らなかつたが其れはどまでも妾の事を思つてお呉れの信實男何んで怨み思ひませう素より良人といふでいあし金で買はれて厭々あがら枕の側をした計り白髪交り引替へて若いお前と夫婦ある其樂みよ

やア替られさいよと再も寄り添ふ夜衾の裏如何なる夢とか結ぶらん既に其夜も丑滿過ぎ便所あ行くんと臥床を出でしお京の襟の障子を明け歩行柏子よさつと吹き來る風も手燭の灯の消え黑白も分ぬ中あるよ向ふへスツクと立つたる男の今は世よあき太左衛門が狩倉をありくと宛も怨しげよ白眼詰めお京が身體へ寄りかゝる其怖しさよ吾を忘れて苦と一聲氣絶をせし物音聞つけ眼覺す權三(權)お京か如何した、何んぞ鏡を被ふつて其様な處に寐る奴があるものかサア起きよ起きよオヤこりや目を廻して居らア如何したのだく

第九 反

明治の後の跡さへあけれど文久年間の頃の最と盛りし濃州岐阜の明地も在る菖蒲樓と呼べる娼舖の京都より容貌よき婦人數多を連れ來て遊女となし客を曳く其釣畏れ掛り來る客さへ最と多かる中該舖でお職の名を賣りし綾衣の許へ屐々通ふ嫖客の内海の權三郎なり今朝も其儘流連よ宿醉腹を癒さんとまた飲みはじめ居る處へ若い者よ案内をさせオット這入るの三五郎(三)是りやア毎も無エ大層早いナ(權)オ、大哥かサア



此方へ來おせへ(綾)政五郎さん能くお出でございました(二)綾衣さん大分眼が凹んで居るぜ(綾)オヤ厭ですよ大丈夫で(權)大哥何んぞ急赤用でもあるのか(三)少しお前よ話度事があつて昨夜茲へ揚つたと聞いたゆゑ其れで寐込みへ出かけて來たの(綾)綾衣さん賊も濟さいが一寸外して呉れさい(綾)宜う御座います妾の一風呂浴て來ますのら緩寛お話しさいませ(權)オイ〜お前行くから何り甘へ物を然ふ云て呉る(綾)アイヨ政さん御免さいませと立つて行(權)然うして己は逢ひ度用たア(三)權三外ぢやア無エダ信州の一件ダバレた様だぜ實に己やア過般から名古屋の方へ出りけて行き昨日當地へ歸りかけ四谷の立場で飛脚体の男が酒を飲みあぐら話を聞きやア信州の松本在で人に識られ伴の宅は江戸から來て久しく滞留をして居た商人と書師の主個ダ死んだ間もかく出立した夜は土藏を破り有金衣類と攫つて逃げた賊のあつた(二)兩個の所爲と段々搜索して見ると妾のお京の其書工と交情もあり暇と取り故郷の岐阜へ歸つたりら大方兩個の盜賊もお京をあげたら知れるだらうと噂があつた(三)此邊で未だ其様お事を聞かないと酒が云りせる高話を己の耳へ這入つたゆゑ直お歸つてお前の許

へ往くと毎ものナン〜で泣きつかれとのを漸と鎮め其れをお前よ知らせに來さ最う悠々しちやア居られ無エセ(權)成るほど其イツア身の上だ盜賊ばかりで止せばいよ又小附よ攫つた那の女今とあつちやア御荷物だの實に太左衛門と殺した事を己が口から云つたりら迂闊な棄てる事も出来無エ(三)お前よ未練お心がかくば棄る工夫の何程もあらうが何よしる長居の出来無エからお前も準備をするがいと伺種々に語ら處へ綾衣も歸り來て三人一坐に酒酌み替す折のら楷子もあら〜しく若い者等の制むるも肯す此の坐敷の障子を押開け入り來る女乃ちお京なり(京)權三郎さんお前餘んまりで御座いませうサアお歸りなされいふ事ダありますと捉へる手先をふりこらひ(權)何をするんだイ不体裁跡りら歸るのら先へ歸りお(京)否々先へ歸りませんた前は今更妾と棄て斯んな女お現と抜かし通れよ義理で御座んぞま(三)コレサレ京さんマア静にするがいと三五郎も押おだひれば綾衣のむつとして(綾)權さん此お人のお前はんのお内儀さんですか大し〜人だ無エモシ斯んな女とい何んです妾だつて不具や乞食ぢやアありませんよ氣と注けてお饒舌なさい權さん寒いうら些度此方へお寄りヨと



膝に絶ればお京の堪らす(京)コレ權三郎さん餘んまり妾を不實すると然うく黙つて居ませぬぞ信州よて伴太左衛門をといふを押へて(權)コレサ何を馬鹿な事をいふのだ(京)サア其れが厭ならお歸んさい(綾)モシ權さん那んなお内儀さんを廢ておままい今日うら妾が如何ともするヨ(京)アノ惡らしい口の利きやう權三郎さん不實にするも此狐メダあるもあぢやエ、腹の立つ寧もうと煙管おつ把り立あがれば(綾)オヤ擲のかエサアお擲ヨ(三)オィくお京さん如何しよものだ其様な事をしちやア亭主の外聞腹も立さうが私あまらせて左右く宅へ歸りさせエ、ハテマア宜からサ、オィ權三先刻云つた事もあるうら今日一旦歸つたうへ何も彼も、ナ、方とつけるが宜のらうせ己のお京さんを連れて歸るから綾衣さん今朝の處の私死に素直に歸してお呉させエ(綾)ハテ命よりけた男ですがお前さんの顔を立て今朝だけ亭主を歸しませヨ(京)アノ悪休をとまた立りくるを(三)ハテマア來させエといふよ

第十反

書工外川竹醉寓と眞面目な名牌の掲げも腹の内海の悪黨權三信濃の尻の破れりふれ高

飛をする足手纏ひと同類三五郎と課合し妻ども呼びて今日まで暮しお京を無慘に切害する二階の宛然劍の山疊を浸す血汐の紅の時も九月の下旬紅葉の色をや添ふるらんお京の苦しき息をつき(京)妾の方こそ怨のわれた前の腹立つ答のあいよ殺す心よなつたのも皆な那の娼妓のつけ智恵り思へば思へば口惜しいと瞋の皆逆立つ顔を權三の毆遣りて片頬を笑み(權)娼妓位の曲尺を其様あら然うと承知をそる内海權三と思つて居るか去年信濃を立ち掛け伴の土藏を切破り金銀衣類を攫つて遁げた其盜賊の此權三と針商人の政五郎本名然宿三五郎といふ甲州生れの悪黨だ書工と觸れ込れ滞留して稼いだ仕事の附けものよお前の馳走よあつたゆる太左衛門を殺した事を迂闊口を迂らした其揚足を搦まつて二言目よ人中を嫌はず怒鳴る蒼蠅さよ疾うのら斯うと思ふうち信濃の仕事の尻が割れ此岐阜までも足が就きツキが廻ると三五郎が聞き込んで来て注進めえお前に因果を含めたらうへ立退りうといふ相談中へ毎もの嫉妬で乗り込んで来た一件と饒舌から最う打棄つても置のれ無エと愕然ながらも手料理で命長柄の川水へ短のう縮めるみの尾張念佛唱て往生しろ(三)オィお京さん酷い奴情と思ひあさるだら



うが己憐兩個も涙へり速へり首と胴と離れ、後同じ地獄へ陥るのだらら腹も立さう  
が盜賊の噂アよなつた因果だと諦め先へ行かせへ(京)其様から兩個の然うした人う妾  
が非業の最期を遂げるも大恩うけた旦那の眼を忍んで不義したのみならず現在旦那の  
仇と知りつゝ夫婦よなつゝ罰の靦面死を怨と思ひねと旦那の仇の權三郎と一言太  
一郎どのへ報知さい(權)其れの洩れるを恐れるうら可愛い汝と殺すのだ(三)權三如何  
だ引導が濟んだら苦痛をさせずすつぱりやつてやるが(權)オ、合點だと立寄りて  
鬼よ齊しき權三郎の再び刀を把り直し胸元深く刺貫ぬけが苦と叫びて四苦八苦虚空を  
掴み息絶ゆしの不義の報と云へばえよ最も無慘の最期なり兩個の死骸を前なる流れへ  
沈めて手早く身準備おし何國を目的とせら浪の行方も知れずありよけり

第十一 反

一年をけふを祭ふ當り年警固手口舞花やうは飾る棧敷の毛氈も色よ出にけり酒機嫌神  
田囃子も競よく來ても見よけり花の江戸祭と清元節あり明の頃より賑々賑々賑ひの神田  
祭よあられぬとも其れよ劣ぬ山王の本祭りとして氏地の町の華美を飾りし江戸の花就中芝

口組町より練出す花車、嵐し山金春藝妓四五人、粧ふ打扮の手口舞姿形當時(文久三  
年)芝口一丁目よ角引廻せし大店の松坂屋といふ名代の呉服屋此の店頭よ慈ひし花車  
の人数の須臾ありて柏子木の音よ再度練り出し暑さを外よ木遣の聲最と勢よく輓き行  
きけり折のら只ある棧敷よて此景態を見物せし商估風の三個の男中よも長九郎の六三  
郎よ扇で風をささみあうら(長)六どん如何だイ藝妓の手古舞の毎見ても悪くあの中よ  
那の春吉の妍媚さ田之助其儘だせ(六)長九郎どのの前だが御同様よお店者と云ひれて  
偶々の木刀休め、深川の小格子へ一枚一本の隠れ遊び其れさへ早歸りでまづぼりと寐  
る夜の夢の見られぬ仕養生涯よ一度の今の講奇藝妓と抱て寐てへものだ(長)オヤ、  
大層意氣地のかい歎息方をそるせお前も松坂屋の若イ者頭六三郎まゝ私も藝番取締の  
長九郎未だ番頭役よのあらかいが随分一人前の手代株藝妓の思ひ妻重妻金さへ出せば  
自由自在だ(六)まゝ長九郎どんが例の高宿りを云つて居るせ其の金が自由よあれば窮  
屈千萬な大店よ子飼鼠で居る者う一番々頭と威張てる那の金兵衛さんを始め己が店  
で金の自由よある人の一人もあいか況て年中飼殺しの鼠の金も嗅がれ無い(新)否々六



ん然うも云いれあいな那の外廻りの屋敷掛五平どのの淺草邊に立派をお妾圍がある然だ  
 ぜ(六)其イッア初耳珍聞く然うして其玉の藝妓の素人か(新)サア私も詳細の知らあ  
 いが何んでも麻の松田屋で喜瀬川と云つて娼妓だといふ事(長)是れの新助とんに似合  
 かい早耳であつた何んでも近日時機を見て五平を連れ出し酔月でも奢らせやうでいあ  
 るまいの(新)併し萬事を穩密に通つて居ると云ふ事だから暇な然うと突き留るまでの  
 滅多な事も云いぬのい(六)成るほど是れも道理だ平常眼から鼻へ抜ける知恵者と云  
 いれる五平だから迂濶云て失策よりマア默言で此方儕も抜け遊びをするが肝要だ(長)  
 フム底もあり蓋もあり其りやア然うと藝妓の手古舞を見て何んだら訝を氣あつた何  
 處でう一盃遣うぢやあいう(六)結構く其等首が休日の眼目を新どん一緒は行りあ  
 う(新)私少し用があるうら後から行かうが何處へ行のだ(六)然うサア酔月賣茶の些  
 と帳過ぎるうら先づ小清水と極めて置らうサア長とん出りけやうと打連れ立つて行く  
 跡は新助の獨り言(新)疾ううら念をのけて居る三春屋春吉が手口舞姿及ぶぬ事と思  
 へども清元の安藏は頼んで置いとが首尾の能返事が聞き度ものぞ

第十二反

白雨も一ふり馬の脊を分けて涼しき川岸は枝垂る柳は除けて窓の日の中刻下り赤細  
 の外套上布緋ひの帷子も汗は鳴海の綾り手拭ひ額を拭ふて清元安藏辯問客の松坂屋の  
 手代新助と一座にて席の名はお久保町の賣茶の離亭に對向ひ(安)何んと新助さん此  
 邊の料理屋で酔月をはため大清水小清水甘い物屋と評判のゆれども万事に行き届くの  
 賣茶は限りヤス何んなお國物でも賣茶と云へば知つて居る丈けが豪勢でも時よ春吉さ  
 んの大層遊いが一寸私が見て來やせう(新)ハテ此暑いに然う立噪があいでも今お來ま  
 せう(安)何んのんと口でい云つても心の裏でお待ち遠でせう(新)マア噪々しいから其  
 の泡盛でも飲まつしといふ折うらよ次の間の葎戸をあけて藝妓の春吉(春)今日の有難  
 うオヤ安藏さんお前モウ來て居るの(安)ソリヤこそ來臨添け梨の水物で取敢すお一献  
 (春)厭だヨ安藏さんマアお前お飲ヨ(新)春吉さんの午睡が長いから安さんの泡盛は飲  
 れてしまつたのサ(安)アハ、如何も其通りイヤ飲れと云は春吉さんが來玉ふ  
 を幸ひ一寸此場を抜掛の高名表のお坐敷へ一稼オ、然うだト推をどはしの廊下傳ひ





二反高子

二十一

芳宗画



表坐敷へ馳て行く後を暇遣りて新助の(新)坐敷の氣輕でかけりや勤まらぬが那の人の  
の喋々し過る(春)眞實も然うでそ夫れも今日の別して酔て居るやうです(新)此泡盛  
を續けて飲んだら今に苦しがつて困るだらう、夫りやア然うと母アへ内々で話があ  
るから賣茶まで来て呉れろと安藏への言傳があつたゆゑ店の都合をして出のけて來さ  
が何んぞ急を申用でもあるのい(春)眞實も斯ん事貴郎も云つての濟みませんが妾の  
母親の田舎育ちで堅ッくるしい事ばかり云つて毎日の小言其れといふも先達ての祭禮  
も出ますとき何や彼やと入費がありまして但さへある借金のうへまた幾分り借りも出  
來ましたゆゑ母の借金をして藝妓をする杯の馬鹿くしいくら廢めてまへと申しま  
それと妾も安藏さんの周旋で貴郎と斯うした中もあつて今さら藝妓を廢めての逢ふ首  
尾もあるまいと其れが苦勞ですから嘘八百を云つて今日まで暮してをりましたうち實  
の一個の兄さんが大層損とした事がありました五十兩といふ金がかけりや當地も居ら  
れないくら是非とも算段をして貸て呉れると頼んで來ましたが其様を事を母親も話す  
とまゝ喧嘩になりますゆゑ何うか母親も知らせず其金を調へ兄貴の難儀を救ひたう御

座いませりら五十兩だけお貸あすつて下さい是れまでの月々五兩づゝのお金を頂くお  
約束もあり未だ満三月もあらぬお客様の貴郎へ御無理を申しまするの妾も申し兼まじ  
た次第ですがふつと一個の兄貴の難儀助てやり度いしますから御無理でいふいします  
お貸あすつて下さいませと露を含みて婉然する花の荆棘の姿に、す心の劍おし匿巧  
計と知らぬ新助の思ひがけあき無心も喫驚三兩五兩の事ならは如何ども工風の道も  
あらんが未だ小手代の仕入方五十兩といふ大金と途胸いつけと春吉の色香も溺るゝ折か  
らゆる深く思慮なく打點頭(新)何んの事りと思つたら金の事の其れ位から雜作もあ  
事如何でもするくら安心なさい(春)其れぢやア貸て下さいまする信とです、夫れ  
で妾も安堵ました

第十三反

世渡りの三筋の糸も細けれと其根性の細からぬ藝妓三春屋春吉が巧計の畏も釣り込ま  
れ深くも嵌る松坂屋の手代新助の五十兩の無心も最ど當惑したるを同じ店にて奸物の  
手代五平が其れと聞くより元來胸も一物あれば仕入れの金とて繰替て貸與へたる五十



雨の後の難儀と心も注ぐ其深切と欣びて馳て其れをば春吉と與へ笑顔を見んと思ひ  
 さや金を渡せし其後の聘ふ度毎に遠出とのまゝの病氣と斷りて挨拶處の顔さへ見せね  
 ば新助とトめて不審と生じ原來の先頃話居る母親の耳へ兄の事知れて内端の紛  
 の訪て往つて動靜を見んと或日三春屋へ赴きて聲をかけたつゝ内へ入れば春吉の火鉢の  
 傍へ小本を讀んで居る對ふに母のお桑の針仕事其れと見るより打笑みて(桑)オヤ新助  
 さん入らつしやい誠にお久しぶりサア此方へ(新)お母ア何處も悪く有りませぬの、春  
 吉さんお前病氣だと聞いたが最ういゝのかと問へども別な欣ぶ色なく(春)妾の何處も  
 不快のありませぬ(新)フム其れづつて昨日も一昨日も酔月から口をのけさ病氣だ  
 うらと云つて斷つて遣しなぢやないか(桑)否々其事あら此娘の知つた譯ぢやありませ  
 んお拒絶を申しましたのの妾でいませすが仔細あつて此娘のお前さんの坐敷へい出せ  
 ませぬ(新)何故私の坐敷へい出せませぬ(桑)是れが普通のお客を直ぐお坐敷へい出せ  
 りませうがお前さんの從來此娘を世話あつたお客でとから知れないうち左も此  
 娘の所天が知つたらへい如何もお前さんの坐敷へい出せませぬと聞くより新助打駭さ

(新)へエー其れぢやア春吉さんに御亭主があるのです(春)新助さん過般お前さんり  
 ら借さ五十兩も其所天は仕送つたのサ(新)其様あら兄と云つたの(春)其りやアお前  
 さん藝妓の巧計といふものサ(新)エ、ハ、ハ、吃驚須臾の辞もなく居たりけり(桑)其  
 れどもお前さんも此娘の世話をまやうといふ御深切があるから其所天に離縁金を與つ  
 て下さい、何もお前さん下谷邊に居る御家人でとら金せへやりやア如何ともありま  
 サア不(新)然らとい知らず無理算段で調へさ大枚五十兩併し斯うあつたら私も意地づ  
 く如何にも其亭主との離縁金をやりませうが何ほど出せば済むものです(桑)然らうで  
 す不し相人が相人ですりら五百兩より低ぢやア六ツかしう御座いませう(新)ナニ那の  
 五百兩エ、(春)お母ア其様事ア云つたつて冗たア不、モシ新助さんお前はんも金春  
 の藝妓を二月あり三月あり抱き舞をすりやアお店者の分にやア過ぎさ果報だから尻尾  
 の出さいうち小廢す方がお徳用だ、他の客を百以上の金を取らけりや打捨らない  
 が松坂屋の小僧脱りと了簡をして大まけお五十兩こつかりで負けておげるから最う分  
 過ぎさ藝妓買ひふつり廢めて相應お私高を買うのが宜からうせ(桑)オヤマア此娘





櫻城編好新機編

二二三



櫻城編好新機編



何んだつて其様事といふのだ子、新助さんお腹も立たうが妾の娘の一酷ですの  
 ら惨免なさいヨお前さんも子藝妓買の廢めすよまゝお店にくすねたお金貯つゝから  
 持つてお出であさい其時よやア娘が何といひませうとも妾が抱のしてわけまさらア子、  
 ハテ然ら腹を立てすよ今日の處にお歸りなさいナ藝妓屋へ来て青筋と立て、憤るなぞ  
 ア紫痴だと云ひますうら茶代の一兩も置いて笑つてお歸りなさい眞實お氣の毒でそ  
 子エオホ、と浮薄極る母子の所業、堪へりねて新助の摺みりうらんどん思ひし  
 ガツツと無念の涙をおさへ(新)長居をまると止めつて何んで斯んお宅も居る奴が  
 、有ものか欺すが常の藝妓とい知つちやア居たが揃ひも揃つて(春)ハテ驢々し  
 ヨお母ア突き出しておまさい(桑)其様な怖の顔をせず早うお歸んおまさいヨと突出し  
 て門口ピツシヤリ(新)春吉覺えて居ると辞を残り立歸る跡に母子の顔見合せ(春)お母  
 ア最う歸つゝか(桑)眞つ赤にあつて憤の處の猿芝居の様だつゝせ(春)何程妾が達者  
 でも同じ店の人を兩個までお客にしちやア居られおいら錢廻りのいゝ源四郎一個と  
 極め新助の方い是れでおまさいサ、其れヤア然うと政さんの方うら二三日便りがな

が如何のしたのぢやあいの(桑)此娘の極まりを云つて居らア一昨日も逢つたぢや無エ  
 の折うら響く増上寺の七分ゴーン

第十四反

蝶一ツ舞ふて出でけり秋日和菘菜草の奥山の平生さへ賑ふ人の足就中今日の十七日最  
 と雑踏を極めたる觀世物小家の裏手に方り某亭といふ小料理屋より微酔機嫌で立ち  
 出づる男女の年も頃合を夫婦と見ゆれどそぐはぬ扮態(是れ權三郎と壹二反の回よあ  
 るお半あるが如何にして兩人が茲も會合せしか開の自然讀下すちうら又判然すべし)來  
 境る途お居合しゝる小兒を連れ婦人の乞食が其れと見るより両掌を突き(乞)御新造様  
 御參詣で御坐りまするか毎度有難う御座います(權)お半お前此乞食よ知己(半)申  
 戲云つちやア厭だよ此人の子大層可憐想を人だのら與てお遣りよ(權)然うの何んだり  
 知らぬいごお勧誘を蒙り善根を致しませうと財布の裏より端錢を把り出し投げ與ふ  
 れの乞食の欣び額づきながら該男の財布に眼をつけ不思議さうよ小首を傾け居るうち  
 に兩個の男女の其場を去り歩行ながらの密々話し(權)然して那の乞食やア何處の者ダ



(半)ありやアお前不妾が今居る代地の家主吉野屋太兵衛の傭人重助といふ人の内儀だ  
が亭主の重助の一年の秋五十兩の金を持つて神奈川とてへ使は往つた其途中で盜  
賊に出逢ひ殺されて金を取られたが那の因強家主だから其れを可憐然にも思はず  
其五十兩を返せと追つて遂々其れが爲めに那の内儀の乞食もなつたといふ事どが薄命  
な人は無エと聞くより權三の胸もギツクリ(權)其れぢやア那の乞食の亭主ア一昨年の  
秋神奈川へ出かけた道で殺され五十兩を取られぬのう(半)然うだと(權)フム  
設しや那奴うしらん(半)お前知つてお出でか(權)何アよ知るもの併し其いつア可憐  
然だが見りやア未だ年も若へお乞食もならずとも何處へ嫁入つたら宜うらう(半)嫁  
入る先が居る位から正可乞食ももありやアお前知たらう人事ぢやア無エ妾だつて恐り  
も思ふ人が浮氣だから心配だヨ(權)其代り五平といふ立派な旦那があるぢやア無エか  
(半)アレマア野暮も大きな聲だヨ(權)べらばうメ五平といふ名は何程もあらア其りや  
然うと己やア是れら根岸まで行くから茲で別れやう(半)其様なら今夜貳度お出でよ  
(權)甘へ物でも調へて置な(半)お前の好む松の籠どつちり買つて待つて居るよ(權)諸

諸氣を注て行くと立別れしがお半の背後を瞥度眺めて莞爾笑ひ(權)屋敷育のお嬢さん  
も小田原の驛場の根津吉原と染み込んだ其泥水で紫痴氣へ抜け己もやア過ぎ者の年  
増ふりとと獨り言する其折より前刻より傍の樹蔭お頭巾で面をつゝみし武士が權三  
郎と喚び留め(士)オイく其首へ行く壯イ者暫く待(權)へイ私で御座へやすう何か御  
用で(士)少し問度事があるから僕と一緒よ一寸參れ(權)へイ畏りました

第十五反

昔より土地に盛りの名も咲きて今日に匂ふ櫻屋の二階の小室に打寛ろぎ相對ひある男  
客一個の兩刀帯すれど一個の伸べしと代月の凄身も知る破落戸懸る中り辭遣ひも崩  
る膝をすまさせて(權)先刻奥山でオイ壯イ者と喚ばれた時おやア愕然してビシク  
もので囁ちやア來たが脱いだ頭巾の面を見りや美濃で別れた三五郎大哥黒羽二重の紋  
附で時代の打扮の狂言の宜脚色でも出來たのう(三)己の姿も喚驚ごらうが京都の畫工  
の竹醉先生が其姿も恐れ入つたせ己も岐阜でお互に別れ別れお逃げた後暫時濱松を  
ころつて當春江戸へ歸つたらへ春吉の世話でお徒町の小林といふ御家人の縁を買ひ



今ぢやア斯う見ても小林政之進といふお武士帯馴れ子ニ大小を荷厄介よして暮すの



此刀を道具に宜仕事と思ふ度にやアお前の身の如何あつたかと案じて居たが測らず

案



出會た今日の都合毎に替らぬ濡事師實に家橋も跣足だせ(權)其れぢやア大哥の御家人にゐつたのか道理で豪勢を形どと思つた私も岐阜より道中と拵了ぢがら江戶へ來て邸這入りの資金よ押借強迫として居るうち當夏淺草代地川岸の妾宅造目と注けて當夜押入下女を縛り女戸主を威して見ると其婦人といふの大哥、常々お前お咄をした私が以前連れ出して小田原へぶち鬻つた本所割下水の籬本中根俊藏の娘おはんサ(三)其イツア奇妙だ如何してまた其處に居るのだ(權)サア聞き無エ其から私の喫驚より先の女も膽を潰し様子を聞きやア小田原から間もなく品川へ鞍替してまた吉原の松田屋へ住み替た後喜瀬川と名をつけられて勤めるうち以前割下水の邸へ出入りとした芝口の呉服屋松坂屋の手代五平といふ野郎が屢々と通つて身購としたうへ此處に圍つて置くかれと親の許へい便りをまてニも母親といふの繼母までおはんが家出を幸へ他くら夫婦養子を迎へ自分の勘當おなつて居るうら詮方なし斯して居ると一伍一什の話しを聞き私も一旦欺した女些たアばつが悪うつたが如何か斯うう口先で瞞着してからの折々お五平の居無エ時を考へ小遣錢と取りわけ所が今日もふらく観音へ出りけて

今夜もまけ込む約束別よ變つた色でもなし大哥の羨む程ぢやア無エ(三)其様ならお前が噂とした那れが中根のお嬢さんう盗賊に這入つて近避ふたア何んだの劇場にありさうお筋だせ(權)其お嬢さんも今ぢやア中々嘘と巧計が達者になり私の手おもおへねへ位(二)鬼の女房よや鬼神だらう然ういふ度胸が出來て居れやアまた相談の種にもならうせ(權)今日お前に逢つた欣びに引替へ飛んだ奴も出ツ會したの先刻奥山でお前が聲をのけた時槐樹の傍に居た女乞食ア私が小田原うら歸り道に鶴見の松原で縊殺した今おはんの居る家主の雇人重助といふ奴の噂アだと(三)フム其れを如何してお前が知つたのだ(權)サア其譯いと語らんとする折しも大勢次の室へ入來し客のありし爲め兩個の話しも低聲となり他よ洩れずなりたるあるべし

第十六反

黄菊白菊其の外にさき花の名を造り咲かせて種々よ手入れを人よ誇り香の彼の淵明の洗れを慕ふと風雅な舉動も陽のみ底意の濁る本所の醫業大多喜逸齋と筆太を標札面と玄關の俗よいふ山師の白痴威し花壇の盛りを幸ひよ來る人もさき客設けも待てバ海路



の日和續きよ今日珍らしく落合ふ客庭の床机は憑る女の容貌さへ美のしく飾り立てたる粧ひの華美に見ゆれど何處やら紫痴な姿のあるも床しく連りお菊を眺め居たり折しも此方の障子を開けて主翁逸齋と話説を志あがら花の造りの丹精を賞して菊を眺むるは是れも主個がヒより長せし口の車を廻しつゝ爰へ招きしものあるべし臺所より煙草盆の火入れと携へ出づる女人の床机の邊に立ち寄りて(虎)貴婦お煙草盆のお火が消えましたらうと云ひつゝ迷ふ顔見合せ(虎)オヤ〜貴婦の小林のお嬢さんぢやアムいません(半)實にお前の虎ぢやあいう如何して當方(虎)ハイ妾は只今芝口の方を走りまするが當家の先生どの前うらのお馴染で菊が咲いたから觀に來いとお使を下さいましたゆゑ今日の松坂屋のお店の若い衆と一途に拜見に参りまじふが貴婦のママ當今何處へ入らつしやいます(半)妾はお前も知つての通りお母さんが喧しいゆゑ所詮一所に居ての苦情の基だからお父さんと相談をして今で此川向ふの代地は居るうら當家へお出での時の寄つてお出でよ(虎)オヤ〜ママ然うで御座いますう然うしてお一人でお入つしやいます(半)少々婢が一個あつたが其れも先過宿へ下りて今で一人だう

ら誰もかまひのないヨ(虎)其れは御不自由で御座います是非近々お窺ひませうが奥妾も今で松坂屋のお店の衆の愛顧あり寡婦暮しで御座いますすが氣樂お致しをります(半)其れやア結構だねエ、虎や一寸耳をお貸し(虎)ハイ〜と何やら密々須臾の打ち語らひて居たりしが程もなく件の女の主翁へ禮と述べあがら傍に居りし男客も會釋をあして立ち出づればお虎の表へ送り出し坐し戻りて主翁は向ひ(虎)先生貴老の那のお方を御存で御座います(逸)左様サ兩三度診察をした事があるが今日の障を聞いたうらと云つて菊と觀に來て下すつたが一体那れ何人だ(虎)那れの子以前妾が御奉公を致しました下谷邊の小林様といふ御旗本のお嬢さんですが奥様が繼子奇めでお可憐想よ今でいお邸を出て代地に入らつしやるとの事町人でも何んでも構ひないから世話をする人が有たら頼と今もお話でしたが眞實よお氣の毒な事です(逸)其れ如何にお氣の毒千萬如何う然ういふ人おれば金錢づくの旦那でさく行々の夫婦までもおられるやうな實体お人と周旋てわけ度ものぢや(虎)オヤ然ういへば傳七さんお前さんの最う一二年経つと宅をお持ちあさる想ですうら如何です那のお嬢さん



と當分世話をして是れあらと見込がついたらお内儀さんよしておわけ下さいナ(逸)如何さま傳七さんのお店の取締りとお堅固方ゆるる恰好お話にあり想事(傳)如何致しまして私風情が那のやうな立派な方をお虎(虎)何にお前さん其首の私分々御周旋申します、子一先生(逸)不肖ながら愚者も悪しき様お執計らひませぬ斯やうな事を周旋致すいお店へ出入りと致す當然の事(傳)成るほど私にも小僧のら只今まで店より辛抱致して今一二年にて宅持ちとなります事ゆる是非判妻を迎へねば成りませぬから先さへ承知がありましたから如何とも其首の相談を(逸)宜しい分つたコレお虎どの善い急げだ歸りま直ぐ那のお方の所へ寄つて、ナ、ッレ吞込んだら(虎)宜う御坐います、グーッと承知です眞實おア縁といふもの、既ちものです子一(逸)コリヤ誰れ居あいか早く酒酒を持って来ら

第十七 反

淺草代地小建て列々長屋の棟に接けども磨き格子に黒塀造り一目も知る妻宅の松坂屋の手代五平が抱か置く毒婦おはんが住居あり今宵も入り込む權三郎が火鉢の傍に大

胡坐寒さを凌ぐ小鍋立猫より他の聴く人の内緒咄しも高聲に(權)未だ代りの婢ア無エのかれ前一人で困るだらうが何故おむらを歸したのだ(半)那んぞ堅造の妾ン處杯に置られるものの子(權)其れも然うさ此様お狸穴へ奉公よ来る奴ア那のお虎の様お悪婆であくちや居られあからう然うして傳七の一件の如何した(半)此間お前話した通り那の傳七の松坂屋で若者の取締りをしてるので五平が店の金を絞りに出すは那奴が居て自由が出来あいうら店へ出入りの洗濯婆アお虎と本所の山子醫者逸齋へ何程の握らせ妻を玉よ傳七を逐々甘く抱き込んで放蕩者よ仕あげる積りで居たらちよ五平の持物とい知らぬが廊に居た事を聞き出しさう變な野郎を代人よ頼み離縁の相談をして来たうら妾の方でも居直つて離縁にするから向後の身のふりおたの附くやうよ二百兩の金を貸てお呉れとぶつおけかゆる代人の喫驚面で歸つた後の音沙汰なしよあつちやア居るが何うせ半分位の相場サ(權)成るほど汝の腕にかけ育つたまゝのお嬢さんで抱込まれた後甲羅の生た鳩おはんと聞いちやア喫驚するのも道理、だが巻あげた其金ア五平が着服目算だらう(半)馬鹿お云ひあ子自分の持ち物を人よ抱かせ曲尺をそる計書を



ウンと云つて脚色んだのり其の金ぐ欲しいをかりサ(權)其ぢやア金い汝の儲けか(半)其れやア當然サ(權)宜腕よあつた無エ然し今夜ア五平が来やし無エか(半)来たつて宜やな汝の勝手あ時よ入抱らせ偶に妾の樂しみをするに愚圖く云れちやア合ねエヨ(權)餘んまり樂しむ風でも無エせ己等が来る度程よでも觸るやうを面をするのらやつぱり五平の元た方々宜のだらう(半)まゝ惡らしいと膝をふつり(權)ア痛へく馬鹿の時代な事をやるぢやア無エか未だ廓居の夢が覺め無エのか(半)時代ある事をさせぬエやう早く夫婦なる工風を去ておくれよ(權)如何してく舎轉々の風車斯う出し目が悪くちや所詮急おやア覺束無エが下谷の大哥と相談して宜い仕事をし其時おやア否だど云つても噂アおするの以前堅てへ約束し若黨權三郎の武士氣性マ、チー、お嬢さん(半)後生だらうらお嬢さんばつりり廢してお呉れヨと打戯れて餘念なき折うらハの襖をわけ(五)大層中の宜事だお入り来る五平の顔見て喫驚(半)オヤ貴郎ハ旦那といふお權三も駭きて(權)其れぢやア此御方が五平さんクモン眞平御免無エ私やア此お半の所天權三郎と云ひやす噂アが長々お世話様もありやしテお禮を申しやス今日の

らハ私ガをりやすうら其お積りで、ダガ云ひ分がありやア聞きやせう(五)コレサ權三郎さんどやら其ぢや喫驚まなるお私も只の鼠ぢやあし、ハテ静よあさい、如何よおはんのいふ迄もあく此諸道具の悉皆お前に進せますから心置きなく是れうら寐泊さつしやりませ其代りに折入つて兩人へ頼む事がある、コレおとん、でいあいお半さん一盃貰ひませうと猪口把りあぐれば兩人の氣味悪けれと仔細ぞわらんと動する色なく膝をよすれば五平の酒と飲干して(五)其頼みといふの斯ういふ譯サ

第十八反

冬枯の色さへ見ぬぬ松坂屋の店の賑ふ客款待列ぶ手代が口々お小僧呼ぶ聲答ふる聲何をいふやら話すやら分らぬ辭が花あるべし日脚も既に未刻下り漸く途絶し客の足に骨を惹ひる手代筒煙草の輪を吹く折うらよ店頭へおろす銀輿物徒士若黨ハ引俱れねど年紀三十五六とも覺し立派の武士が附添ひ輿物の扉と押開きて裡より出づる一個の婦人の年ハ二八の二九のらぬ大振袖の邸風徐々店へ入り来たれば其れと看るより手代筒の適れ美人吾が方へ勝よなして他へいやらじと口を揃へて(手代)入らーはい入らー



ウンと云つて脚色んだの、其の金欲しいをかりサ(權)其ぢやア金の汝の儲けか(半)其れやア當然サ(權)宜腕よあつた無エ然し今夜ア五平が来やし無エか(半)来たつて宜やな汝の勝手も時よ入よ抱りせ偶に妾の樂しみをするに愚圖く云れちやア合ねエヨ(權)餘んまり樂しむ風でも無エせ己等が来る度、よでも觸るやうな面をするのらやつぱり五平の兀た方が宜のだらう(半)まゝ惡らしいと膝をふつり(權)ア痛へく馬鹿の時代な事をやるぢやア無エか未だ廓居る夢が覺め無エのか(半)時代な事をさせぬエやう早く夫婦なる工風を去ておくれよ(權)如何してく貧轉々の風車斯う出し目々悪くちや所詮急おやア覺束無エが下谷の大哥と相談して宜い仕事をし其時おやア否だど云つても噂アおするの以前堅てへ約束し若黨權三郎の武士氣性ダ、チー、お嬢さん(半)後生だらうらお嬢さんばつくりの廢してお呉れよと打戯れて餘念なき折うら火の襖をわけ(五)大層中の宜事だも入り来る五平の顔見て喫驚(半)オヤ貴郎の旦那といふお權三も駭かして(權)其れぢやア此御方が五平さんウモシ風平御免無エ私やア此お半の所天權三郎と云ひやす噂ア長々お世話様もありやしテお禮を申しやス今日の

らり私をとりやすうら其お積りで、ダガ云ひ分がありやア聞させやせう(五)コレサ權三郎さんどやら其あ喫驚ななるお私も只の鼠ぢやあし、ハテ静よあさい、如何よおはんのいふ迄もあく此諸道具の悉皆お前に進せますから心置きなく是れうら寐泊さつしやりませ其代りに折入つて兩人へ頼む事がある、コレおとん、でいあいお半さん一盃ひませうと猪口把りあぐれバ兩人の氣味悪けれと仔細ぞわらんと動する色なく膝をよすれバ五平の酒と飲干して(五)其頼みといふの斯ういふ譯サ

第十八反

冬枯の色さへ見ぬぬ松坂屋の店の賑ふ客款待列ふ手代が口々お小僧呼ぶ聲答ふる聲何をいふやら話すやら分らぬ辞が花あるべし日脚も既に未刻下り漸く途絶し客の足に骨を惹ひる手代煙草の輪を吹く折うら又店頭へおるす飯輿物徒士若黨の引俱ねを年紀三十五六とも覺しき立派の武士が附添ひ輿物の扉と押開きて裡より出づる一個の婦人の年の二八の二九のらぬ大振袖の邸風徐々店へ入り来たれば其れと看るより手代儂の適れ美人吾が方へ勝よなして他へいやらじと口を揃へて(手代)入らーはい入らー



は—いと猴が餌を乞ふ景態よて連り又頭を低ぐれども見向きもやらず店の上りずつと  
 帳場へ打ち通れバ茲又坐したる番頭金兵衛駭き顔みて兩掌を突き(金)難方様か存ト  
 ませぬが御注文の儀されバ二階へお通り下さるゝとも又店よて御覽遊ばさるゝとも  
 御隨意で御座りまするが此所の帳場で御座いますのら(政)拙者の注文の品あつて参  
 つこのでない當店の手代傳七と申す者へ用向があつて参つゝ者だ其方の當店の番  
 頭か(金)ハイ左様で御座いますと金兵衛と申して當店を主管致す者で御座います(政)然  
 らバ其方に談トやうが拙者の下谷彦徒士町又住む小林政之進と申す彦直参よて是れお  
 居るの拙者の妹よてはんと申す者だが近來兎角多病ゆゑ醫者の勧誘により淺草代地  
 邊へ出養生を致させ置さしお當店の手代傳七と申す者ど早晚情を通じ由にて妹の懐  
 妊致しより武家の法されバ兩人とも手計は致す筈あれど實の義理ある妹ゆゑ假令後日  
 又組頭より嚴責あるとも生命を斷つゝ如何にも黙然と存ト今日妹の勘當致し當店へ連  
 れ來たりし事あれバ然るべく傳七へ傳へて養育の事を願ひあり金兵衛とやら妹の確と  
 預けさぞコリヤおはん何と嘆く不義致せしむ汝の不了簡身の振方の傳七と相談致せ拙

者の直ぐ又歸邸せしと立上らんとする動靜お金兵衛駭き須臾と留め(金)マア〜お  
 待ち下さいませ承まはれば駭き入つゝる傳七が不埒早速處置を附けますれバ何卒暫時  
 御休息を願ひます彦承知在らせられまする通り當店の伊勢よりの出店にて男子計りの  
 事で御座いますうらほ嬢様をお預り申すまごの中々出来る譯でい御座いませぬ情願暫  
 く〜彦猶豫を(政)如何さま男子計りゆゑ預り悪いといふも道理ぢや然らバ暫時待  
 うから如何やうにも妹の身の片附きのなるやう執計らつて呉りやれ(半)妾が淫行ゆ  
 ゑお兄様へ彦心配をうけ濟みませぬと如何した譯り傳七どの事ハ諦められませぬ  
 と打まはれさる娘の舉動の嘘り實の白髪のお金兵衛頻を首を垂すりつけ(金)左右く二  
 階へお通りを願ひます、六三郎彦案内を申うせ甚だ見苦し御座いますが何卒〜と  
 強て二階へ揚げる跡にてオツと思つた(金)ヤレマア飛んだ事だ出来し者だコレ五  
 平とん聞かしやつゝ怪しかる次第でいあいう傳七ぞんの如何しませぬ奥藏へ往つた  
 と早く呼ばつしやい〜是れ如何したら宜からう(五)モシ金兵衛さん如何の斯う  
 のと云つて此店へ女を擔ぎ込んで來さぬ孰れ〇にする計畫でせうから早く思ひ切つて



出しの方江湖へばつとせずと濟ませう(金)其れで濟む事あらお前能く執計らつて  
下さい(五)宜う侈座います損料貸で威し込んで來る貧乏旗本追つ返す譯の侈座いま  
せん然し先づ此位でせうせ(金)其れで承知するごらう(五)せぬと云つても其首の  
私が追つ歸す方便が御座います(金)何分頼むと云ふ折のらと與藏より立出づる傳  
七(傳)金兵衛さん侈用で侈座いますか(金)侈用どころウコレ傳七どんお前のマア飛  
んでもあいな事をする人だ

第十九反

善惡を判つ憲法を龍の口評定所とい聞くみれと今日ふりうりし禍ひを云ひ解く事  
も覺ゆる身の不品行と罵懲され邪正を判つ人もかく虎狼又齊しき五平儂が巧計の畏  
は陥りて店を逐れし傳七が道三橋お投しかくれ空さへ聞く雨もよふ往來あければ獨  
言(傳)八歳の年うら本店は奉公をして十五の春江戸のお店へ上つて後のお店の爲めを  
思ふゆる品行を慎み漸々と若イ者の取締は登庸られて今年一歴辛抱すれば通ひ勤めの  
一人前然るある時國の親父を呼び迎へてと思ふので何卒相想を嫁があらばと心算

の折も折去年の秋おどらと共お大多喜の菊を觀つた時圖らず出會ふ那のおはんの  
小林といふお旗本の娘おれと繼母の中が折れあひす今の代地は分家をして世話する人  
が欲しいとお虎へ話を眞實と思ひ自滅を招く此身の爲め惡魔ありとい夢知らす二月  
三月世話をするうち能々聞けば旗本の娘といふ云へ那のおはん元吉原の松田屋で喜瀬  
川と云つた娼妓脱りと知れての中々怖氣立ち人を頼んで離縁の話を云ひ込んで見ると  
二百兩の離縁金を渡して呉れると本根を吹いた古狐馬鹿くしき話をまとめず棄  
て置いたが吾の誤り今日乗り込んだおはんの体は屋敷姿でそらくしく特にお兄の政  
之進と名乗つた奴も同穴の狸野郎と思つたゆゑ面の皮をバ引き削いてと直きの掛合を  
まやうと云へと金兵衛どのと五平が禁め締あたらだて暖簾の恥辱とみすく強迫と知  
りながら二百兩を渡し兩人を歸しうへ吾へ今日うら暇をやるは無理な處置も大番  
頭の採配より左や右くと云へぬお店の規則ゆる是れより深い様子があらうと注  
ぎの老れと何といふも那んな女に關係が此身の落度と涙を呑んでお店を出でお  
虎を捉へておめあげなら此奸計の發黨人が願れやうくと往つて見れば四五日前のら



何處へ往くやら行方も知れぬと近所の評判此うへい率その事町奉行所へ訴へてと思つたかれと然うしていお店の噪ぎとなるのみか陪々江湖へ傳七が胡慰とある事と諦め一旦國へ歸つうへ本店へお詫をまやうと心と決しあがらも一步の金の用意もあければ勝手を知らぬ道中へ踏出す事も氣にのりり所詮此うへ苦勞をせんより死んで親父や本店の旦那様へ申譯と覺期を極めて茲までい來たが諄々も三十年も近き勤めの辛抱も一時に破る、此度の災難俚諺いふ千日に菊つたる萱の失策も元いと云へば一目見しおはんの色香も迷つたばかり是れを思へば女はと世お恐ろしきものいあ、慎むべき此慈情前も立たざる後悔ながら死んだら江湖の壯年者のまた懸鑑もある事であらう其れを當世の思ひ出に六道あらぬ道三の橋から飛び込み然うぢや〜と小石を袂より拾ひ入れ落る涙を揮ひながら南無阿彌陀佛の聲ともいふ斯うよと見えたる折しも側の柳の樹の蔭お窺ふ男が飛んで出で背後の方より確乎留め(與)オットどつこい待ちあせ(傳)離方うの存じませぬが如何の見逃がして殺して下さいませ(與)イヤ殺せぬえ何んだら知らぬが諄言の背後で些つたア聴いたうり何れ死ぬよやア及ばぬエ乃公やア

神田の雉子町の與太郎といふケチ大工左右の宅へ來あせへ、コレサ、た前も壯年といふでも無エ飛んど短氣入だ子へマア氣を落つけて聞かせへと力を極めて引合せ(傳)ア、モシ然う手酷く引きおしあすつては痛う御座います(與)馬鹿云ひあせへ死あうといふ覺期で居て痛へ位お駭くたア成るほど茲イ等がお店者だ子エ

第二十反

俚諺又大奸の忠よ背たりと松坂屋の悪手代五平と云へるの兼て同店の支配を己一個の手に握らばやと只管姦謀を施すものあら未だ己より顔の古き主管金兵衛銀兵衛の外に源四郎傳七新助ありまた其他に長九郎六三郎杯云へる者もあれど此二人の何時のほどおの手搦け同意させしも彼の五人のみ眼の上の瘤なり然れど金兵衛銀兵衛の所謂愚直ともいふべき者にて是れを籠絡するの最と易く特より六十有餘の年にて向後も知れり只源四郎以下の三人を早く放逐せんと百般姦謀を巧み竟先づ傳七を店より放逐しり一体是の五平の屋敷廻りを擔當て諸屋敷へ出入りをあすうち中根の娘おはんに惚込み頻胸を焦すと雖も身分違ひの事ゆる云ひ寄りて得心すれば宜けれと若し腹



立ちて父母へ告げられて、身の大事と容易に口へい出さざりしは一年向島にておはんの一群が観花に時測らず若黨權三郎と通居るとの噂を聞き(當話一反は載す)去る淫行の所為あるうへに其れを言立て己が慾を遂げんものぞと思ふ折らおはんの權三郎とともに出奔し行方知れずとなりしゆゑ宛然掌の裏の珠と奪われし心地せしが其後二年を経て吉原の松田屋に登り意瀬川といふ遊女を聘びしおはんは是れを焦れしおはんにして權三郎と逃げたる後小田原にて云々との物語となし近頃當廊へ鞍替せしおはんは此末ともお憑よまつて給ひれと以前のおはんとは異りし手練巧計に持ちうけられて五平の忽ち心傷け竟身購し淺草代地へ妾となして園置さしむ何時の程より情夫權三郎が立ち入る様子と聞き知れ口へい出さず傳七を放逐す種とあしたるうへ潔におはんを權三郎に遣り彼の強迫の狂言を頼みしは權三郎の早速承知し憚る事には屈竟の甲州無宿三五郎今小林政之進と兄と仕立て松坂屋へ乗り込んだる爲め傳七の永の暇もあつたるよぞ五平の首尾奸計成就し店より受取りし二百兩を四折に預けて身分の更に柳橋のおゆつといふ藝妓に馴染み頼り居たりしが再て是れより源四郎と新助

の兩人を放逐す種もやあらんと計畫居るうち其年の十一月店勘定の期に近づきし或日五平の新助を密に土藏へ招き入れ(五)手堅いお前の事だから催促をするも如何だの實の前年取替の五十兩去年の帳尻より如何の斯う融通して置いたなれど今年も些と都合もあるら一旦返して貰いたいとお前の都合の出来まいかと云はれて新助首を掻き(新)誠延びて濟まさいが那の金も就いては實は口惜い事がある其譯といふいと(是より春吉に欺りし事を語る)其んる事を云て断るでいあければ今暫く待つて呉れまいかと語るの五平の思ふ坪(五)其れぢやアお前那の春吉の一件の知らさいの(新)春吉の一件どの(五)那の女の源四郎どんとい人も知つたる深い中だ(新)エ、と顰顔色變へれば(五)ハ、ア其れで分つた事がある去年の冬長九郎どんの話しは源四郎どんの大しゝ色男だ春吉と馴あつて何處の手代から五十兩取つた想だと聞いたが其れぢやア其の手代といふはお前の事の何程色男だと云つても現在同じ店のお前より金と取るとい呆れゝ男だ此節聞けば源四郎どんの内儀が春吉の事から大ナンナン度々噪ぎもあつゝゆる内儀を離縁して春吉を内へ入れるとの事其様の中を知らずよ五十兩を取られたり



お前の手ぬけだぐ曲尺をする源四郎どんも朋輩甲斐のあい無情赤人だ(新)然うどの知らず五十兩を駄き取られたのみならず婆々アと兩個が悪口雑言皆源四郎が教たのでぼらう(五)オ、然共く皆源四郎どんの吩咐であらうがお前も男だ黙言て居ての意氣地があいせ(新)一寸の虫も五分の魂五平どん何卒氣の毒だが五十兩の今少し待つて下さい(五)然ういふ事なら長うの待てぬが暮の仕切りまで延ばして置かうと尙も煽動する折ら店の方より手代小僧の來るを見るより兩人の話と他は分れけり

第二十一反

慶應二年三月猿若町の市村座よて興行の狂言の傾城傾山にして俳優の市村家橋(當今の尾上菊五郎)故人河原崎國太郎故人澤村田之助の一座よて傾城岩藤太夫と新造初菊の役よの家橋田之助が一日替りまた尾上太夫の國太郎が勤め初日以来の大評判ふて出揃の後の一層増さりし客に賣り切る棧敷土間是非一日の觀物と春吉よねだられ源四郎の店の首尾して出かけたうへ同人とお虎の兩人を連れ東の棧敷で見物の舞臺の既よ草履打の場あり(春)眞實お毎見ても家橋の宜俳優ですチエ(源)近時の中々腕が宜くか

つたがまた那の田之助の巧計よの駭いたものだ(春)然うですチエ初菊の家橋より宜う御座いませうのら今日の宜時來ましたオいお虎さんね前の芝居を見ずよ酒計り飲んで居る(虎)姐さん御免あさい妾のもう先刻より那の岩藤太夫が憎くつてくならあいでそのら自在酒を飲んで居るんで(源)那んあよ苛めると面が憎いやうだ(春)苛めると云へばお前さん新助さんの如何をましたらう(源)然うさ其後些とも便りを聞かあいが何んでも淺草邊に居るとの噂だ(虎)妾も去年うら房州の方へ往つて江戸よのをらす此間歸つて來ると傳七さんも新助さんもお店くら暇なつたとの事妾も春吉姐さんのお母アのお没去だうら此節手傳よ參つて聞きましたたが如何いふ失策があつたのですチエ(源)新助が暇よあつたのの知るまいが傳七の一件のお前と本所の太多喜さんの満更知らあいと云へまいぜ(春)新助さんよ暇の出たの五平さんおら借りたお金の事だと聞きましたたが然うです(源)然うサ何んでも一昨年五十兩の金を五平おら借りて去年の暮よの旁々返と誓を間違た處のら大勢の中にてアノ五平が恰ど岩藤太夫が尾上太夫を苛めるやうよ手込めにしたうへ大番頭へ告げ逐々店を放逐されるが其金の原因



も何んだか女又與つゝ一件といふ事己の當日店居なるつたゆゑ執成をする事も出来  
なりつたが誰うと詫をしてやれば宜に不人情極まつた朋輩サ(春)何んでもお店を出て  
うら銀座の髪結床居たとの事ですが那の人も五十兩位の金で意氣地のない譯ですチ  
一(源)傳七と云ひ新助が暇にあつたも如何やら五平の悪知恵らしいが那奴の中々油斷  
が出来ぬエと話せばおとら春吉の顔見合せて(春)一寸お覽なさい初菊が岩藤返報を  
せますヨ

第二十二反

先今日の是れ限りとうち出す太鼓の音とくも芝居を出づる源四郎の春吉お虎と伴れ  
立つて茶店まで歸りの身準備あし山の宿は棲たせ置きたる家根船も乗り込み漕ぎ下る  
船の裡より春吉が三味線手も把り爪弾の聲も仇めく二上り新内

わたしが風ひいて寐てるたら枕の側へそつと来てまゝでも喫ぬの薬いと其深切お引  
き替へて今の邪慳いエ、マア如何したこつたエー

(虎)姐さんの聲の異實は男殺したヨ(源)殺しと云やア其新内の深川の藝妓己の吉が自

作で大層流行つたものだ想だが藝妓の意氣地あふりつけられ絹商人の甚之助といふ者  
は築地の波除稻荷の川で切殺されたと講釋師も聞いた事があつて思ひ出し(春)共事  
の芝居ですると縮屋新助と藝妓三代吉と云て船の裡の殺しですぬエ(源)然うともく  
何年であつたり小團次と菊次郎が演たり大當りであつたこの事だ(虎)新助が藝妓の己  
代吉を殺すも船の裡源四郎さんが春吉姐さんを殺すも船の裡同じ殺すといふ事でも憎  
くつて切殺すと可愛くつて口で殺すと大層違つたものですねエ(源)またお虎が油と掛  
るせ(春)船の裡で殺すの新助の何んだう氣障だから其様を尋ねお廢しよ(虎)實は妾  
が氣注かなかつた姐さん御免ささいヨと仇めく話の其中に源四郎の障子とわけ(源)春  
どの云へど夜風で寒いが最う何處邊まで歸つたらう(虎)然うでせぬエ船頭さん茲は何  
處だ子(船)ハイ永代の洲ですといふ折から上手より頼りよ該船を呼び立つれば(船)  
オヤ旦那エ上手から来る三挺が連りよ當船を呼びやせ(源)何んだ船と叫ぶ誰れだら  
う(春)お店の衆が用でもあつて芝居まで出かけた歸りぢやありませんの(源)大方其ん  
ぢ事たらう」折から茲へ三挺ふて聲をうけつゝ追ひ來たりし船を見るより家根船も漕



ぎ止むれば立ち出づる一個の男の懐中より賃金與へて三挺の船を離れて此方の船へ乗  
 従しを提燈の灯りも透し見駭く春吉(春)ヨヨお前の新助さん(虎)何んで新助さんだ  
 と實もコリヤア新助さんだ(源)何んだ新助さんだ来た、オ、新助さん如何して茲へ來  
 のだ(新)他でもあいな命を貰ひよ來た(源、春、虎)エ、(船)其れぢやア亂暴者か(新)エ、  
 喧しいと腰も帯したる一刀抜いて船頭の脾腹を横小研りつくれバ苦と叫びて川中へ筋  
 斗うつて落入つたり夫れと見るより源四郎の身構へおして油斷せず(源)命を貰ひよ來  
 たといふ己も怨の事でもあつて(新)春吉といふ化け猫と心をあはせて新助あよく  
 も恥辱をあたへさると血走る眼に朱を濺ぎ源四郎が辞の耳も入れず今船夫を切りつ  
 けさる共血刀を振り翳せば三個の生たる心地のあく身を死れんよ船の裡堪りかねて  
 源四郎の船先の方へ逃げんとするをズツと這入つて腰の番ひを發矢と切れバ進する血  
 汐を見るより春吉の傍あつたる煙草盆の火入れを把つて早速の眼潰しばつと立つた  
 る灰煙りに少し躊躇新助が手の下潜りて臆も出づるを汝を逃がしてあるものくと眼眩  
 みあがら帯際を捉へて引けば黒縷子の丸帯解けて春吉の身を跳して井りと名も大川へ

飛び入りて生死も知れずあるを見て源四郎お虎の大聲も人殺しと叫ぶよ新助の  
 是れまでと所厭いで兩個の首を滅多切りに切りさいあみホット一息源四郎の死骸を暇  
 遣り足下踏へ(新)ヤイ源四郎汝が最期の自業自得人を呪ひし報の親面お虎の怨おけ  
 れども止め立するより道伴れさせたが只春吉を取り逃がしたの諄々も遺憾だ併し女で  
 此川へ落つて所詮助うるまい去年の暮れお五十兩の金ゆゑ店を暇とあり其れも汝と春  
 吉ゆゑと其時うらして附現へど好折のらもあかつたが今日沙留から家根船まで乗出し  
 たのを見つけたゆゑ跡くら属て見度もあいな芝居に一日辛抱して遂々茲まで本望遂げた  
 り是れで當世に望もあけれバ俱も流れの藻屑とあらんと馳て短刀咽喉も突き立て其の  
 まゝ川へおちこちの残る浮名ぞうたてける元源四郎の毫も悪意ある者あらねと春吉が  
 色香も感溺せしより竟に五平が姦計の術中へ陥り新助の刃も懼り死し新助もまた其の  
 場を去らず命終りお虎の所謂傍杖の横死も傳七を欺ひし應報と云へバ言酷も涉れど  
 亦強慾無情の結果と云いんり獨り姦婦の春吉のみ未だ茲より死生を知らず

第二十三反



大夏の娘覆らんとする時一柱の能く支ふべき也



○あらし芝口  
一丁目老舗  
たる松坂屋も  
手代五平が  
毒舌に眩  
惑され  
店を

○主管の金兵衛始め其他二三の管伴も邪正を照らすの眼鏡をく曇り傳七を放逐し承





た幾千ならざるは復新助も暇を遣り該兩人の後任に五平を擧げしより今の主管人よ  
も増さるの威權ありし折ら暇を遣りし新助が源四郎とお虎を切害し利さへ藝妓春吉  
の水中へ陥入りて行方知れずありし事を切られおぐらふ川へ投ぜし船頭が逃げ歸り船  
宿へ報知同家よりの松坂屋へ急報せしほど同店の駭き大方おらす五平の直ぐに船宿へ  
出向き何分公邊沙汰ありて暖簾の恥辱ゆる如何やうも内濟く此事お就いて  
も多の金を出だし賄賂と以て諸役人の口を留め人夫を出して源四郎、お虎、の死骸を取  
片附しが新助の死骸と春吉の生死だけり更お手懸あらざり斯る噪ぎに松坂屋の店の  
漸次お衰頹を招き手代丁稚お至るまで其虚お乗じ筆頭の融通私費の濫出より店の勘定  
お不足勝りて本店よりの補費を云ひ送りしにぞ重立ちたる者お一應師店せよとの返答  
ありて金兵衛銀兵衛の兩人の店を五平お委ね出立したるの慶應二年六月中の事ありし  
が五平の兩人の不在を幸ひ大お仕事をさる上りて身を退のんと思ふよを兼て同腹中  
なる長九六三の兩人へ何う囁き謀合せぬ同月十五日の例の通り山王の神祭あるも將軍  
家御上洛中お付き延引となりたれお大店向の店中のみ酒宴を張りて寐お就きし其の

夜も丑満過る頃何處よりの立ち入りけん黒の頭巾お面を覆ひ眼ばかり露す武士三個  
各々抜刀手に携へドカ／＼押入り正体おく倒れ臥し居る手代小僧を鮮々縛りて土藏の  
前に戦き怖る五平を職遣り(浪)ヤイ其方の當家の番頭(五)サ、左様で座りま  
す(浪)吾々の水戸浪士の者だ今般外國人を打ちはらふお付き軍用金お入用だから借  
用お参つた金の在所へ案内致せ(五)私し金の在所を一向お存じませぬくら其儀おら  
ば其處お寐てをります若お者おお聞き下さい(浪)コリヤ其方が存じてをると云のら  
案内しろ(長)當店の本家からの指揮おて金の貯蓄の座りませぬ(浪)愚圖く振らす  
と擲つ切るをサア右も左も土藏へ案内しろ(長)へエーと只得先お立てお後より監介兒  
の附き従ひ土藏お入りて甲乙見廻し(浪)各々見られお腐つてお鯛とやら此千兩函の裡  
にどつちりおありませぬ(浪)金おともお此處おあるお付けの反物類お持ちへりませぬ(浪)  
左様致さうコリヤ若お者此金子及び反物類の天下の爲めに吾々浪士お借り受くるおと  
云ひつゝ袂おいさぐり呼笛お振り出し吹きおらせお同お打掛の曲漢おばらくと顯れ出  
で六人一緒お金函と反物類を引遷へ何處ともなく白浪の消て跡おなくなりけり



第二十四反

娛しみの夕顔柵の下涼みと直實赤塚の其れならで毒悪無頼の權三夫婦の不義貪る金銀にて驕奢又耽る非道の所行玻璃の器ももる洗鯉銀の箸にのけて喫ふ冷素麵川風うけて夏知らぬ坐敷の椽よの燭を點し打ち興じたる酒宴の一坐り五平政之進(政)五平さんの顔を見ると思ひ出そが過般の戦慄梅の中々巧手ものだせ(權)然うサ眞實雁入も跣足だ(五)雁入といふ見立ての役不足だが大哥衆が水戸浪士といふ威一臺詞の了得は盜賊の道の盜賊だが己も随分骨の折れた役廻りサ(權)然うして其後の店の様子如何です(五)如何の斯のと云つて那の一件の飛脚を國へ立てると直ぐは本店の支配人が來て閉店を決し子飼中年を問はず赤公人の悉皆暇あつて大混雜其れの元來覺期の五平駭く事い少しもあいが數年續いた松坂屋の暖簾を芝口お見ぬとい憾いわけサ(政)旨事を云つて居るせ其暖簾を疊じた黒い鼠の誰だらう(權)故々店をあらしうへ邪魔にある朋輩の奴の難癖つけて放逐し人殺しまでさせよ惡黨餘んまり暖簾と憾む風でも無エせ(政)お前のお庇護で春吉も俱よ玉あしにする處だつたが宜瀬梅も助りつて命一ツ

拾へものサ(五)其語が出る此五平の實に穴へでも這入り度あるが那の新助の源四郎を殺すほど怨むとい思ひあかつゝ實は彼事の閉口の外あしだ其代りよの店へ手引し首尾能取つゝ三千兩外は絹布が五百反随分大した拵了をさせ己と長九郎六三郎一人分の千兩で口と拭いゝも一件の謝罪があるから帳消サ(政)私の方でも横槍の忠次といふ仲間を連れて三人掛の大芝居衣裳の損料外の奴等へ分配をして高飛をさせた旅費を差引すりやア格別な仕事でも無エが残りつてある反物が多く積つても千兩餘マア那丈けが餘徳だらうサ(權)三(權)私等も向後悪事を廢めて堅氣もあり小商法でもとる時よやア多少資金の入る事ですら五百と千と無エ時の如何する事も出来やせん其代りにやア何日何時御用よあつてもお前さん情の罪の背負てわけやすうら命の代りの配け代よやア相場外れの安い拵了サ(五)成るは然う聞けば有難い然うして政さん春吉さんのお壯健か子(政)久しく便りをえやせぬが變つた事もありやすまい其れよりのモシ五平さん長九郎や六三郎の口の開か無エやうよ云つて置なせ(五)サア其の事での私も心配何だ俄よ持ちつけあゝ纏めた金ダ手よ入つたので毎日の様お遊んで居るの



狂ての疑ひを招くとも昨日もしく云つて置くたが



松本清張

四十一

店居るう左も右はも云くはも涙人の身のうへに其様





如何も那奴等よ困つゝものだ(政)聞きやア此節忠次の野郎と一緒よつるんで歩行といふが何んだの案じられたものサ(半)向しろ今夜此四人が親類交際の酒宴たのら五平さんも一獻お過ごしなさいナ(五)權三さんの前ぢやア如何だがお半さんの今の勤めい久しぶりだのら其れぢやア最う一盃飲みませうと話しまいと餘念なく盃把つてお半よ酌させ飲む忽ち苦痛の体(五)アイマ、ア、痛ヘア、苦しィア、痛(權政)如何したく腹が痛へ何う喰合せが悪うつゝのだらう(五)ア、痛ヘア、苦しィと悶へる状を打ち瞰遣り(半)成ほど毒と云ものア斯んぢや早く効ものぢやと聞いて駭く權三郎(權)其れぢや汝が如何かしたのう(半)藏の勿論暖簾よまで穴をあけたる悪戯鼠奴の口うらばれ無エうち抱寐をされた體心で鼠取りをバ飲ましよのサと云はれて五平の仰天し(五)借のオ、オノレぢ(半)權さん締めておまさいヨ(權)ム、其細帯を貸しねエ(政)成るほどお半さんの宜度胸よあつゝ不エ(半)當然サ鬼の女房だヨと夫婦齊しく立ち寄つて苦しむ五平の咽喉を一しめ息の絶るをとくと覗ひ(權)最う没つたの腕へ奴だ然うして此死骸の如何ぢやう(政)譯やア無エ裏うら直ぐに氷葬禮タ

第二十五反

明治の後の橋を架して往來の便を得られども昔の茲も渡し船を麻川岸より漕出す船の中より深編笠にて面をつゝめと立派の武士未だ少年の供を俱に渡る向の川岸よりして淺草の方へ漕來る船が今武士の乗り居る船とすれ違ふとき少年の向ふの船の中を見て(太)ヨ、其方の外川ならずやと吾を忘れて立ちあがれば向さよ乗り居る商人体の男の駭き船頭お金を與へて早くと呼ぶ指圖よ心得浪を切り漕行く後を打瞰遣り(太)先生那れが索る外川と申す私しの親父を殺し奴で御座ります、コリや船頭此船を廻して呉れる(桃)コリヤ、太一郎儒く事なきい今見認めしとて御法を犯して復讐をなして濟まぬ心配致す此江戸に在る事さへ分つたあらば身共が本望と遂げさせてやらうりら先づ氣をまづめる(太)左様で御坐りませうが見す、出會なから取遣がすい殘念で御坐ります(桃)ハチ桃井春藏が附て居る其方の悪いやうにいせぬ惜ぢ(太)先生只今の風体を見ますに何うも商人の様と思ひれます彼の一体内海權三郎と申す浪人脱りの破落者であつたと兼て先生へお話を申し上る通り亡父の妾お京と申す





者<sup>もの</sup>が 彼<sup>かれ</sup>を 不<sup>よ</sup>義<sup>ぎ</sup>を  
 なして 岐<sup>ぎ</sup>阜<sup>ふ</sup>へ  
 立<sup>た</sup>越<sup>こ</sup>同<sup>どう</sup>人<sup>にん</sup>の 爲<sup>ため</sup>殺<sup>ころ</sup>害<sup>がい</sup>  
 され 舛<sup>まち</sup>々<sup>ま</sup>其<sup>その</sup>以<sup>い</sup>前<sup>ぜん</sup>に  
 密<sup>ひそ</sup>に 認<sup>と</sup>め 置<sup>お</sup>し 慚<sup>ざん</sup>憤<sup>げん</sup>  
 の 文<sup>ぶん</sup>を 某<sup>ある</sup>者<sup>もの</sup>に 托<sup>たく</sup>し  
 送<sup>おく</sup>り 來<sup>き</sup>し まじ た ゆ  
 る 詳<sup>くわ</sup>く 竹<sup>たけ</sup>醉<sup>すい</sup>の 素<sup>す</sup>性<sup>じやう</sup>  
 も 知<sup>し</sup>り 親<sup>おや</sup>の 仇<sup>あだ</sup>と い



ふ事も分りましうが中々容易ならぬ悪黨ゆゑまた何り姿を化けて居ると見えませす(桃) 面体も身共の能く見覺ぬたからよの假令何國へ潜匿るとも遁がす事でない安んをし  
る(太)何分も先生の御助力を願ひます(桃)承知致してをるサア着いたぞ」此兩個を  
何人うと聞くと少年の信州下諏訪の伴太左衛門の二子太一郎よして岐阜のお京が權三  
郎の邪慳を憤はり自ら前非と悔ひて太左衛門と殺せしり同人の所爲ありと一伍一什を  
書送しよと始めて知つたる父の仇俱不戴天の古語さへあればと一通の書を遺して國を  
立ち退き直さま岐阜へ赴きしり同人のお京を切害し出奔したる後あれば其れより京  
都大坂と索しうへ江戸に來たりて聊かの知己あるより南八丁堀ある桃井春藏氏の許へ  
至り面會を乞ひ所存を明けて願ひしり元來義氣ある劍客なれば聞届けて吾家へ留め置き  
只管劍道を教授し居るあるが慶應三年の秋九月測す麻川岸まで權三郎を見認めしゆ  
る桃井の早速町奉行へも依頼し搜索し手を盡しけり

第二十六反

二間は足らぬ店頭から價直の廉と代呂物は詐欺のなき正直の主個が首は宿るある神

田多町は矮少ある古着太物を渡世よとる伊勢屋傳七の表より聲をりけつゝ入り來るの  
雉子町の消火夫與太郎(與)傳七さん内うち(傳)オ、是れは頭能くお出でなすつたおひ  
ら雉子町の與太郎さんが入らしつゝ(村)オヤマア頭此節の如何ぞつたり些とも入  
らつしやらぬいから一寸妾しが御無沙汰のお詫言々上らうと申してをりまするがお庇  
護で店が忙しい爲め誠は濟まぬ御無沙汰を(與)何うして〜無沙汰のお互サ用も無エ  
のよヒヨコ〜と餘計なお饒舌を玄に行くでも無エサ心の裏は無沙汰せへあけりや一  
年が二年でも別々忙しい中を來るよア及ば無エ、處で今日來たの傳七さん用ひの  
あるのサ其用といふの今更めて云ふでも無エが一昨年測らす道三橋でお前を助けて連  
歸り詳細様子を聞いて見ると悪る御家人う小旗本の内會師の毘に罹つてお店を逐され  
たと思つゝゆゑ憂をもどめて松坂屋へ度々詫も入れぢやア見たが何んだの五平どりの  
ふ人おあややあり想で詫言も左右くよ出來無エ相談がらお前も毎々で私の宅へ食客を  
そるも氣兼ねたらうと京橋の隠居は話して聊かながら資金を貸して仕馴れぬ商買根が正  
直お前だけよ此近邊ぢやア安伊勢屋と小暖簾ながら聲價をとりなすつたゆゑ私も嬉



しく其につけても獨身ぢやア何りも不自由であるらうと其首の女だけは私よりの噂  
 アが氣が注ぎ其おひらさんを女房も周旋した喜びのら何卒序いで松坂屋の方へも出  
 入りの叶ふやうな爲度  
 よ心配をして居るうち  
 とオイ傳七さん那の松  
 坂屋の閉店たヨ(傳)エ  
 エ其りや眞實で御座い  
 ますの(與)聞きやア何  
 んでも新助とかいふ若  
 衆が朋輩の源四郎と出  
 入のお虎婆アとりを殺  
 し自分も死んだ大騒ぎ  
 のあつたうへまた大勢



の浪士とかも押込み大  
 した金や反物を盗まれ  
 るので持ち切れず國か  
 ら管伴の出張つて来て  
 店の衆も暇もあり遂々  
 店を閉ぢる事と今朝京  
 橋の店へ往つて詳しく  
 様子を聞いて來るが  
 前さんも無落膽だらう  
 (傳)其りやア飛んでも  
 かい事が出來まじ然  
 らして暇にあつた人の  
 皆知何しましたらう(與)  
 何んでも五平とかいふ奴  
 が那の店を倒  
 したとの噂があるよ(傳)  
 其五平の事に就いて實  
 の貴郎へ御相談に出  
 のけやうと存じ





ました其譯と申します此おむらぐ先年奉公をしてをりました先の私分欺ひられた小  
林といふお旗本だの御家人だかの妹おはんの宅で御座りまして(與)其イッア不思議だ  
(傳)然うして其宅おの權三郎といふ者が折々入込み亭主氣撥でをりますが其實の五平  
どりのいふ者が世話をするとの事また政之進といふ者が来て何やら密談をえたりま  
の夜る遅く大勢の人が来たり何んだか怪しい宅ゆる暇を取つたとの事ですが其五平と  
いふ者の人相を聞きまゝするよ全く店おをりましよ五平は相違ないと思ひますので那の  
おはんの一件も五平の巧計かと思ひれますといへばおむらぐ話をついで(村)卑妾がを  
りますうち五平と申そ人を二三度しの見かけませすまた何處の人やら知りませぬと  
傳七の話聞きまゝすと如何も其人のやうで御座います(與)成るほど然う聞きやア如何  
も怪しい實の松坂屋へ這入つた押込みの事よつき芝の手先の徳五郎ら若し聞き込ん  
ご事でもあつたら知らせて呉れると云つて居たが其れを話さら何の種もあるも知  
れ無エ其りやア宜事を聞いた私やア是れくら直ぐは往つて來やう(村)貴郎今何もあり  
ませぬが一献飲つて(與)ナニ酒か、歸りよドツナ、馳走よなりやせう

第二十七反

花は惜む、黄昏の鐘に花ぞ咲く廊の景色に不夜城の道入る者荷よ出る生美と例言もあ  
れぞ知りつと迷ふ其大門を一度酒れバ忽ち我身を空蟬ののらりと違ふ後朝は早や魂の  
脱空して好待遇不待遇の評とりと(長)オイ忠次さん毎もあがらお前の大待遇の様子  
であつたが左右く那處の舖の三尺帯の廣袖が娼妓相應を容筋と見え吾等の様も旦那肌  
の未だく口は適ぬと見ゆる(忠)長さんまだ不待遇たと見え極りを云つて居るせッ  
リヤ然うとオイ六さんお前那んあふ口留をして置く元松坂屋の店の者だと云つと  
子私等アお前方を堀留の江州店の人だと各自の敵妓よ云つて置いたお今朝私等の娼妓  
の顔鳥お前さんの唾を吐さんヌ那の長さんに六さんの元芝口の松坂屋に勤めた人だ  
と昨夜六さんが花月(六三郎の敵妓なり)さんよ話しあんしよと云つたゆゑギツリし  
たの其りやア花月さんが欺されたのだと云ひ消ちやア置いたあれとお前も餘ッばど男  
らしく無エ口健赤人だせ大さお聲ぢやア云ひれ無エが何んでも此節定廻り去年の一  
件よ付いて松坂屋の手代と云やア目を注げて居るから努す兩人の者よも知らせて置け





宗



詰ら無事と饒舌なものだ(六)成るほど是れの大失策實に那の花月といふ汝留の  
 或船宿に居た婢で己の顔を知らず居てお前さんの松坂屋の六三郎さんだと目星を指れ  
 今更違ふとも云ひ兼てマア〜然うだらう位の挨拶をして睨と然う云つた譯でもあ  
 がお前さん云ひ見られて見りやア一言もあしサ(忠)昨日も新堀の大哥から此節届く佐野  
 権へ通つて居るといふ事だらう若し他の事で問をうけられ兩人の口が開いていあら  
 い暫時足を抜がい〜と意見が来たゆゑ私當分野州の方へ出かけやうと餞別うた〜



出掛たのだが六さんぐ松坂屋の手代だと口を迂らしちやア身の上だから當分廊へい來  
さいやうよ兩人とも氣を注げさせへ(長)五平が死んだ其後の他も憑るべき家もないの  
で此長九郎と六さんのお前の宅の厄介もあり段々見馴れ聞き馴れに覺れ込んだる強迫  
騙術此様子あら師匠があくても如何う斯うの仕方もあらう(六)吾等も是れを口健の  
屹と慎み吉原へも當分足をぬいさうへ若來た處が川岸を替へ勘付くれぬやう用心を  
う(忠)其れがいよく私等も下谷の大哥を頼まれ那の松坂屋の大仕事も出かけた後の  
お前衆と懇意もあつて遊びのする五平が死んだ其うら後身も慎めと云われるので他  
よ大した拵了もさいゆる大分懷裏もメリガ來たから田舎を廻つて遊代が出來たから江  
戸へ歸る筈だが横鎗といふ渾名のある刑狀持の私等だから是れが別れもあるかも知  
れ無工随分壯健であらう事あら未だ素人氣の抜け無工腕で危い藝をえやうより眞面目  
に拵了方が宜せ那の新堀の大哥のやうよ二ツあつても三ツあつても足りぬエ首の接て  
居る悪黨でせへ眞面目な店を張つて暮すも身の用心お前も是れから那處へでも這入り  
筆と十露盤を持ちが却て徳だ(長)毎よないお前の意見成るはと道理千方だ(六)毎も大

門を出るまでに浮氣心が廢まさいが今朝の何んだか染々とお説法でも聽いたやうよ悲  
しい氣持にあつて來たぜ(忠)然う聞きやアお互に安心だ其れぢやア是うら平松で一杯  
酌つて別れるとえやう(長)此大門を替くハ潜る所存を廢めたの今朝まであつた若荷  
性が大方生妻にあつたのであらう(六)併し毎でも此門を出入るハ悪くあいののだと話  
しあがらも大門を出つればばらく取まく人數(手先)御用だ神妙ふしりと繩をうけん  
ときさうしよぞ忠次の透さず(忠)南無三嘆へ込んだうと逸足出して遁出し行方も知ら  
ずあつたるにぞ(手先)ソレ忠次と遁がさねエやう早く(長、六)ア、桑原く万歳  
樂(手先)喧しい御用だ御用だと縛を繩とかけたりけり

第二十八反

北新堀の樹酒渡世武藏屋權兵衛とい假の名よて本名内海權三郎の過ぐる年松坂屋の手  
代五平と謀合せ曾て悪事の同類ある甲州無宿三五郎今ハ小林政之進と其乾兒ある横鎗  
忠次外三人の悪漢と部下引連れ浪士姿も身を打扮らて松坂屋へ押入りしうへ五平等  
又案内をさせて三千兩と數百反の絹布類を奪ひ各々徒黨に分配しよが奸婦おはんの左



右くに五平の在るを憂情思ひ遂に毒藥を用ひ殺ししるのち松坂屋へ押入りし強盜の詮議嚴重ありと聞くより淺草代地の家を経み北新堀へ酒舖を開業し夫婦の外より樽集の小圃二人を備ひつゝ陽の清し渡世あがら陰より濁る入れ樹の底の巧計の人知らねば須臾構を洩居たり今日も小圃の華主廻り店への主個が帳合まひ煙草燻す折からよ表の



方より駈け込む忠次(忠)オ、大哥居あすつたり大變く(權)大變たア如何したのだ(忠)他ぢやア無エが過般注意ろといふお前うらの知らせのあつたを兩人の奴も耳うちをして私等も當分野州の方へ走らうと饒別旁々三人連れ立ち廊へ出掛て今朝の歸に大門口を出るや否や御用と張る綱を羅り長九と六三の押へられ私等ヤア一生懸命も茲ま



で報知ふ来やしたたが那の意氣地の無エ兩人だから問にうとつちやお前の事ありまた下谷の大哥の事をペラ／＼喋舌らア知れてゐるのら些とも早く走るがいとせと聞くより權三も打駭さ(權)其イッア飛んでもねエ事さ、お半や／＼(半)アイヨと一室を出づるおはん(半)忠さん委細の聞いゝが最う詮方が無エお前のお徒町の大哥の方へ(忠)其りやア合駄は是れうら直ぐは駈けつけるが然うして大哥の問は權三の腕又さ(權)ばれの時よと準備をしし持船に乗つて流れ次第は走ると覺期のまてゐるから大哥よあつたら云つて呉ン無エ(半)斯ん事のさいやうよと五平の妾が手料理したうら残の兩人も音を止めて枕を高く爲なさいと度々云つたお肯無エおら足下うら立つとり物沙汰慈悲が却つて仇にあつた(權)馬鹿ア云ひ無エ何うせ選への速へうちよ御用もあるおア知れた事サお前も懸黨らしく無エ其様も懸黨と云ひあるさんお特にやア先ごろお麻川岸の渡しの中で見かけた奴の信濃ではらした伴の二子吾の面を見て頻お呼んで居たのお京の一件あり自分の親の仇といふを知つたおも知れねエ何うせ長く居られぬ驅幹早く走るが身の爲めだ(忠)懸黨たア云へ下谷の大哥の儘うら扶持でも御家人様私等を

捕縛へるやうに容易い譯にやアゆくめへがお前の宅への勘酌をし斯ういふうちよも来るかもえれ無エ早く準備をえさるのい(權)準備も何も入ることつちやア無エ物した物をものして返す夫婦の身體と兇器せへわりや何處へ云つても不自由のまぢへオいはん其抽斗くら金を出し(半)アイ(權)忠次こりやア少ねエが路費にし(忠)私等ア一個で走るうへ殊よやア近へ野州廻り路費も何も入ら無エから先まら浪を漕で行く船路の手當が肝腎だせ(半)忠さん妾等も構のあいで持つてお出で(忠)夫れぢやア折角の思し召し姐公費つて置きやせう(權)コレ忠次何うせへ此世ぢや逢入れめへと大哥へ傳言して呉ん(忠)承知まやした其れぢやア随分氣を注げなせへ最う逢ひやせんと詞を後ふ立去るを見て(權)毎も威勢のいゝ男だ、サア準備しる直ぐよ走やう

第二十九反

東海道平塚の驛より十八九丁を距りて眞土村といふ土地あり當時の下總佐倉の城主堀田家の領地よして戸數の百戸よ足らねども五千石餘の收納ありとか當村外れよお正とよふ寡婦暮しの其の家へ親戚の者として江戸より來し三十路お近き手羽女が食客となり



日を送るに憚る鄙より人目立つ纏致のみりの衣服さへ華美を飾るの云いでも知るさ妓  
 者の果と知られたり未だ肌寒さ春の夜の凌ぎよ一献酬飲んで寐んど主個の酒屋へ出で  
 行きし不在の件の女一個が同じ糸どの云ひながら手馴れし三味の糸あらで繰る綿糸の  
 細けれと太き性根の政之進が繋がる縁の扉口(三)オイ春吉くお春一寸開けて呉ンあ  
 (春)ハ、誰方です今あけますヨと立上りて庭より下り切戸を開き顔見て喫驚(春)實にお  
 前の三五郎さん(三)ア、コレ静よし(春)如何してマア今時分おと云ひつゝ内へ伴へ  
 ば三五郎のお春も向ひ(三)跡を閉て、呉んを誰も差合の無エか(春)伯母さんが居るん  
 だけれど今酒屋へ往つて不在だから大丈夫マヨ(三)其イツア何より宜都合マ、コレ春  
 吉遂々悪事の尻が割れ己等一昨日の夜芝の山内で銀張りの賭券があつて出りけて行  
 き運悪く悉皆取られたうら歸らうとして御成門と出ると突然二三人が突當ると直ぐ御  
 用と聲かけ佩して居た大小を取らうとしたのハ手先の奴と知つたゆゑ此方も一生懸命  
 に其場を切り抜け山内から赤羽根門を出て二本榎の猿町の忠次の宅へ寄つて聞さやア  
 弟の話も忠次の野郎一昨日の朝後徒町の己等の宅へ来る處を御用よなつて引かれた

が權三夫婦、好都合よ走つて綱の目を渡れて己等の株があるだけに紐頭へ届けをして  
 手當のなつゝ一件だ折よく三日宅をわけ遊び廻つたが身の幸ひ然し江戸も居られ  
 無エから大山街道へより双子を渡り昨夜の溝の口の龜屋の泊り漸ど茲まで遅けて來  
 たが是れを暫し京坂へ高飛をする丁箇ゆゑ無事歸るの歸れぬやら夫れで一寸暇乞  
 よ來たのだと聞くよ一々駭くおはる(春)其れに能くマア來てお呉れた妻もお前の知つ  
 ての通り新助さんの爲め殺されやうとしたが繋いであつた船お取り着き漸と命を拾  
 つたゆゑ江戸に居て、那の人お出會また何んか目に遭はうかと思へば怖さに居たま  
 れず其夜のうちに駕とやとひ當村に居る伯母さんを憑つて來て仔細を話し匿れて居る  
 うち情々と思ひせば従來お造りし罪が恐ろしく其れよつけてお前の身も何うぞ  
 眞面目お人おあり夫婦よあつて俱様き今まで人おかけたる難儀の万分一でも減するや  
 う慈悲善根が爲たいと思ひ度々手束で云つておあげたが返事のない改心の出來ない  
 事と諦めるにつけ眞一度逢つて諄々と思ひ意見をしやうと思つて居たが其れぢやア遂々然  
 らいふ身よ(三)爾の口うら左様云のれりや何んだか極りダ悪くあつたが權三郎も頼ま



れて那のおはんをバ妹に倣立て松坂屋へ乗り込み傳七へ云ひ分つけて二百兩を強迫て  
 取つた其原の人形遣へ狸の五平其れから那奴と懇意もあり果の打扮もあら拵了の三  
 千兩と絹布類を櫻つて逃げ大仕事も五平のおはんの毒を喫いせ片づけるので宜かつ  
 たが長九六三といふ兩個の奴が吉原通ひで耳より遂々ばれ悪事の尻尾三夫婦も  
 北新堀で眞面目な稼業の爲て居たが大方平生の話し通り佃の沖に繋いである所有船も  
 乗り遣げたのであらう己も爾が云いさくつても悪い事だと氣の注いた度々あれど踏  
 ん込んざ此泥足の何年経つても洗へ落せぬ汚れた軀幹毒喫や皿と長た横道今の遁げて  
 も到底の命を納めよやあら無エと其分別のしてゐらア(春)妾が斯んを事をいふとお前  
 に愛想が盡たゆゑと思ひであらうガモシ三五郎さん那の權三さんの爲めよ現在  
 伯父の敵です(三)エ其りやまた如何いふ譯でと尋る折ら表口より(正)イヤ其故  
 の妾が話しませうと云つゝ這入る主婦のお正(正)おはるが久しうお世話おまつた三五  
 郎さんとやら妾の此女の伯母お正といふ者お初にお目にのります(三)其れぢやお前  
 さんガ春吉の伯母さんですか(正)委細の様子ハ戸を洩れて聞くともあしよ聽きましよ

が姪の爲めよ所天に齊しいお前さんゆゑ向後の妾が引きうけ世話をさせよう遠い土  
 地へ走らすとも暫時茲にお匿れささい(三)了得の春吉の伯母さんだけゆつてマア何分  
 願はず然うして今聞きやア私等の兄弟分權三郎ガ春吉の伯父を殺しよとやら一体其り  
 やア如何いふ譯で(正)其譯といふマア聞いて下さい此女の父親の妾の兄よて元ハ甲  
 府の九十郎といふ者兄よハ男の子が一人ありましたが早く女房よ死別れ男の手一ツで  
 育てる事も難澁ゆる敵澤の彌七といふ者へ親知らずにてやりし間もあく江戸へ出後  
 縁あつて此お春が母親の聲とあり其の身の定まつた趣きを妾の許へ知らせて來ましよ  
 が當時の妾もまだ所夫重助どのともよ當眞土村よをりましよなれど所夫ハ淺草代地  
 の吉野屋といふ質商へ雇ひ住み込み正直律義の人あれバ店の万事を委せられ雷村よハ  
 重助どのの質母を遣して妾も江戸へ行さしうへ兄の許へも訪れもまましたが此姪の前  
 での云ひ悪くけれど兄の後妻の現在娘を藝妓よまやうといふ人あれバ所天や妾と蒼蠅  
 がる擧動もあるもので其後の打絶の音信もまやう兄の病死をえたとの報道お愈々疎  
 遠となる折のら所夫重助の店の用よて五十兩の金を持ち急よ横濱まで赴く途中鶴見の



並木で追剥れ出逢ひ金の勿論命まで奪れて敢なくありましよを憫然と思ひず邪慳者主人が其五十兩を償へよと日毎の催促據ころなく些少の衣類調度と主人へ渡し世に愧のしい乞食とあり下がつての艱難の何卒所天と殺しざる其盜賊と捜し出し度女の念が屈さしか或日淺草の奥山よて妾へ錢を呉れたる男の所持せし財布の見覺ゆる所天の實母が手織の縮柄然も妾が縫裁た烈地丁度横濱へ赴く時五十兩を納れて持参をしたと思ひ出して其人こそ正しく仇と思ひましたたが連の女の元主人の吉野屋の貸店にゐる圍妾お半といふ事のゑれてあれば篤と穿議としたらへよ訴へ出るも遅うらじと立別れしうへ代地へ行きおはんを圍ふし旦那を明けど何處の人とも判然お知れずおはんどのへ直々又問て見やうと思ひましたたが迂濶お云ひ出し若し違つて先の人へ分疏なしと思ひますゆる憚る心を押さづめ日を送るうちおはんの旦那の新橋松坂屋の手代傳七といふ人と聞き奥山で見た人の姿態のお店の衆との見えなんだが是れどの別な人あるの右も左く逢つて尋て見んと松坂屋へ行き様子聞く其傳七の不都合あつて暇と出して何處へ往つたか行方知らぬと店での隣原來の愈は傳七とやらこそ所天の仇であつ

たりと直ぐに當地へ立歸り姑にも告げ見遣した遺憾話お日を暮すうち姑女の荷且の病が根て果敢なくあり妾も他所へ出られぬ身ゆゑ其まゝ家にをりますれど何卒所天の仇をと思ふ處へた春が来て松坂屋の手代の爲めに云々と明けはど怖しい如何お流れの唄女でも其様を噪ぎを惹起すといふ天の発さぬ罪造りと嚴しい意見とまましたゆゑ此姪も改心せましたやら以前は變る炊の業生れ變つて來たのうと疑ふまでお眞實な働き昔語りの其うちに血筋ああらねど姪と思へば彼の傳七の事を話せしは傳七さんといふ人の二三度逢ふた事もあれど中々其様人ではない其財布の權三郎といふ三五郎どのの朋輩が持つて居て宅の婢も呉れ品と同ト手織縮柄と聞く容貌の奥山にて出會つた男も相違なく特におはんの情夫と云ひ從來悪き所爲のゐる人なれば所天を殺し金を奪ひし追剥れも權三郎とせめて知り訴へ出でよと思ひつゝまたれと爾なる時ひ蔓から蔓ともつれが咲て義理ある姪の此女にうゑる難義もと思へば無念とじつと堪へし知れぬ昔と諦め居る心の裡とコレ三五郎どの察してお前も向後の悪事を廢めて此お春よ安心をさせ正しい道と稼いで下さい頼みまする(春)血筋でない義理を思ひ妾の難



義よあらうりと伯母さん有難いお辭せし三五郎との何卒改心して下さり(三)始めて聞いた身の上話併し今更乃公の悪事を廢めた處が百姓業や眞面目も稼の出來無エ身分其れよりやア爲馴れた悪黨何うせへ長く無エ命太く短くやつける積りだオイお春爾も斯んち田舎に燻つて居ず花を咲かせて贅澤しろ(春)今も今どて頼む下ら其様を無法事事を云いすお前素より權さん改心として伯母さんへ詫をするやう勤めて下さり(三)べらばうメ五十兩位の目腐金で殺した奴儂の親族の者お詫事をしてあふものか其れよりやア權三郎に汝を仇と規つて居る寡婦があるうら後腹の痛まねやう殺てままへと己が吩咐てよこすうらオイ伯母さんお前も覺期をして良人の傍へ行かないと思ひがけなき惡体口お正も憤とし(正)其れでい妻が是れはと云つてもお前の改心する氣のまいり(三)改心處かお前の良人を殺した仇の權三郎の己の爲めお弟分すりやアお前との仇も同士弟に代つて己れが斯うすると佩さる刀を抜きはなせばお春の駭き(春)待たせやんせお前の伯母さんと殺す氣り(三)知れぬこつた(正)お前の様も悪人の手にのりうらぬ切れるものあら切るがよい(春)アレ伯母さん危険い退りしやんせ(三)

エ、面胴をコレ伯母さん權三郎を斯うして切るのだと云つて刀把り直し己れの腹と貫け(正)は、自分よ妻の手を持ちそへ(春)自分の腹へ突き立たのいと訝る兩人三五郎の苦しき息をはつと吐き(三)お慕うじや伯母さま何を包さう私い甲州鯉澤の彌七方へ賞られたお前の兄九十郎の倅幼名丸の助で御坐りますと名乗る喫驚(正)エ、ハ、ハ、(春)其れでい胤腹違ふと云へ(三)オ、名乗れば兄妹(正)伯母甥りと順與呆れて辞なし(三)前非を悔む三五郎が今ぞ現在伯母さん逢ひ眞身の意見の天道が死ねよと教る慈悲の責めもシ伯母さんコレお春己が罪狀消滅の爲め從來盡した悪事の頓末書取り置いて死んだ跡まで地頭へ訴へ出して呉れと苦痛ながらも身の上を爲せし悪事の物語り一伍一什と書き取らせしは了得健氣の舉動あり

第三十 反

鳥波玉の闇も黑白も見えぬ夜の沖も怪しや星のとも疑ふ光りの見えさるる正しく浦賀の關こゆる白浪の徒ら然なくとも此浦役所へ寄せずして規則を破る船なるべし各自急ぎ追つ蒐けよと見張の者が指揮に順ひ二艘の小船は十八餘りの捕吏の乗り込み四挺船



の腕をうきりと漕ぎ出だしぬ」(水夫)佃を發る時の追風すら二百里餘の海上も譯あく  
兵庫へ着きやせうよ生憎お暴風續き併し此浦賀沖を乗つきりせへすりや最う大丈夫な  
船足ですヨ(權)毎ものやうに浦役所へ寄つて霞文見せると違ひ其浦役所の關を破り遣  
げる身分とあつたのも積る悪事の報が來たのだ(半)權さんお前氣の弱へ事ばりお  
云ひだす江戸は有り日日照るめへし京坂筋から長崎まで拵了をし上唐天笠へも走  
る心よおありなチー(水夫)成るほど姐公のいふ通り斯う乗り出して遁げた日よやア逮  
捕のりくる氣遣いあし大哥大船に乗つた氣で居なせへと話しのうち權三郎の沖の方  
へ聞き耳立て(權)何んだう人聲がする様だが分ら無エかと云はれて氣の注ぐ水夫等窓  
の戸あけて透しちぐめ(水夫)モシ大哥頻と漕いで來る船が有りやすが若し浦役人ぢや  
ア在りますめへの(權)先刻汝が船椽で煙草を飲た吸売をボンとはいいた海の中其の火  
の光が眼張た役人の眼注きいせぬかと己やア心配をして居たが能く浦抜けの灯を消  
しても煙草の火でやられると云ふ話を聞いさうら殊に寄つたら捕吏だせ、おはん灯を  
點ろ(半)お前捕吏なら燈の事灯を點す走るが宜せ(權)べらばうメ陸を駆け出す様よ早

速く遁げられるもの此風空で取巻られて如何する事も出來ぬさうら灯を點て尋常  
の關を破つた船と名乗り捕吏の奴を斬殺し脇のぬまでもやつて見るのだと性根を据し  
所天の辞もお半も點頭(半)妾もお前が危くなつたら豫ての通り船は火をうけ(權)よ、  
夫婦一緒に魚の餌とあるのだオイ若へ者茲が一生命だ準備をしてふつらめろ(水夫)  
合點だくと皆身準備あそ折こそわれ早漕寄せる捕吏の船權三郎の甲板は突立ち(權)  
ヤイ汝等の浦賀の木葉手先だナ己やア内海權三郎といふ關破だのら船へ足でもりけや  
アダると片ツ端から踏殺そぞと呼ぶ聲聞くより捕吏の首領(首吏)無禮の過言彌よ權三  
郎だッレ乗込めくと皆々船に乗れば水夫の各々身構あし(水夫)ソラ來さど負る  
か(首吏)先の刃物を持つて向ふとも殺さぬやうよ生捕が肝腎だぞ過ちあきやう注  
意めされ、水夫どもの四人の召捕たどあ、よし、那の權三郎といふ奴は女房がゆる筈  
ぢや胴の間の方船底を穿鑿さつとやいと双方烈しく討ち合ひしが天網洩れず權三郎の  
遂小細まどかくりける(首吏)ナニ權三郎を生捕たとべさく海中へ飛び込まれての大  
變直ぐに小船で護送る方が宜ろしい、サア残りの人数の女房を捜しめされといふうち



おはんの兼ての覺期(半)其れぢやア權さんもお手よあつたの此上の武士の娘らう三尺高へ木の空で變つゝ色の死首を晒されぬやうオ、然うだと臆の方へと駈け行きしが貯へ置し火薬をバ火鉢に投入れ忽ち燃出し煙りの其中に懐劍把つて咽喉と貫き果敢なく最期を遂けたるの悪の報と知られたり(捕吏)ソリヤこそ女の聲がコリヤ堪らぬ臆の方より焼け出しよぞ、正しく女が自害の体ソレ殺さぬやう斯う燃出しての所詮寄り附けぬ孰れも小船へ避けさつしやい女を殺しての残念だが本人の權三郎の此の通り生捕たれば安心だ(權)お半能く死んだ今よ己も跡うら行くのら地獄の門で待つて居ろ(捕吏)鬼の女房に鬼神とやら中々お氣丈な女だ

第三十一反

兇賊内海權三郎も竟も悪運盡たるよや相州浦賀よ於て召捕となり當時の同奉行土方出雲守自身に是れを糾問きたるに包む事なく從來の犯罪逐一招丁せしゆる其處分の儀を江戸表へ伺ひ中ありしよ折柄所用あつて伴太一郎を同伴し該地へ來たりし桃井春藏が測らず一日出雲守と談話の砌太一郎が身の上の事を語りしよ其賊あらば先頃當浦役

所に於て召捕取調濟よて今よ其處分方を江戸表へ伺ひ中なりとの土方が噂よ桃井の早速此趣きを太一郎へ云ひ聞けし後聽て一通の願書を奉行所へ差出だし沙汰を鞍らしよ數日を経て伴太一郎及び其師桃井を召喚とあり出雲守の辭を更め(出)信州下諏訪在伴太左衛門一子太一郎(太)ハツ(出)其方前年父太左衛門を内海權三郎の爲めに殺害され其復讐を思ひ立ち遍歴中右の權三郎事當役所の手へ召捕とありしを聞き復讐致し度願を上げしが確と左様か(太)御法の禁せられし所どの存じあがら何分にも俱不戴天の怨恨止み難く願出でまして御座ります(出)桃井春藏(春)ハツ(出)其方の門弟あるよし申し立つるが相違ない(桃)如何にも拙者門人よして平生父の仇を報ひ度趣きを申し唱をりましますが尤も品行も方正あるうへ其性質も純良ある者お御座ります(出)左様のコリヤ太一郎其方の願道理に聞こゆれを權三郎事の當浦賀役所乃ち海上の關所を破りし大逆ゆる者あれバ願小對し差許す事ハ相成らぬ既に同人の處刑方の閣老へ伺ひ中の事にして今更私しの取計ひの出來難し併し今日の權三郎をも召喚置たれば其方が懲を散するまで又突合せんソレ權三郎を(同心)ハツ、權三郎引出しました(出)コリヤ權



三郎其方ハ此少年を存せざるの(權)如何にも存せざり也

④(出)先頃予が詔

問の柳太左衛門を

銃殺致したる趣を

を申し立てしが緊

と其れ又相違ハか

ららの(權)自身

招丁何し又偽り

を申しわけませう

(出)此太郎ハ

目下桃井春藏の門

又わけて其方が當

浦賀殺所へ召捕と

ありしを聞き今日

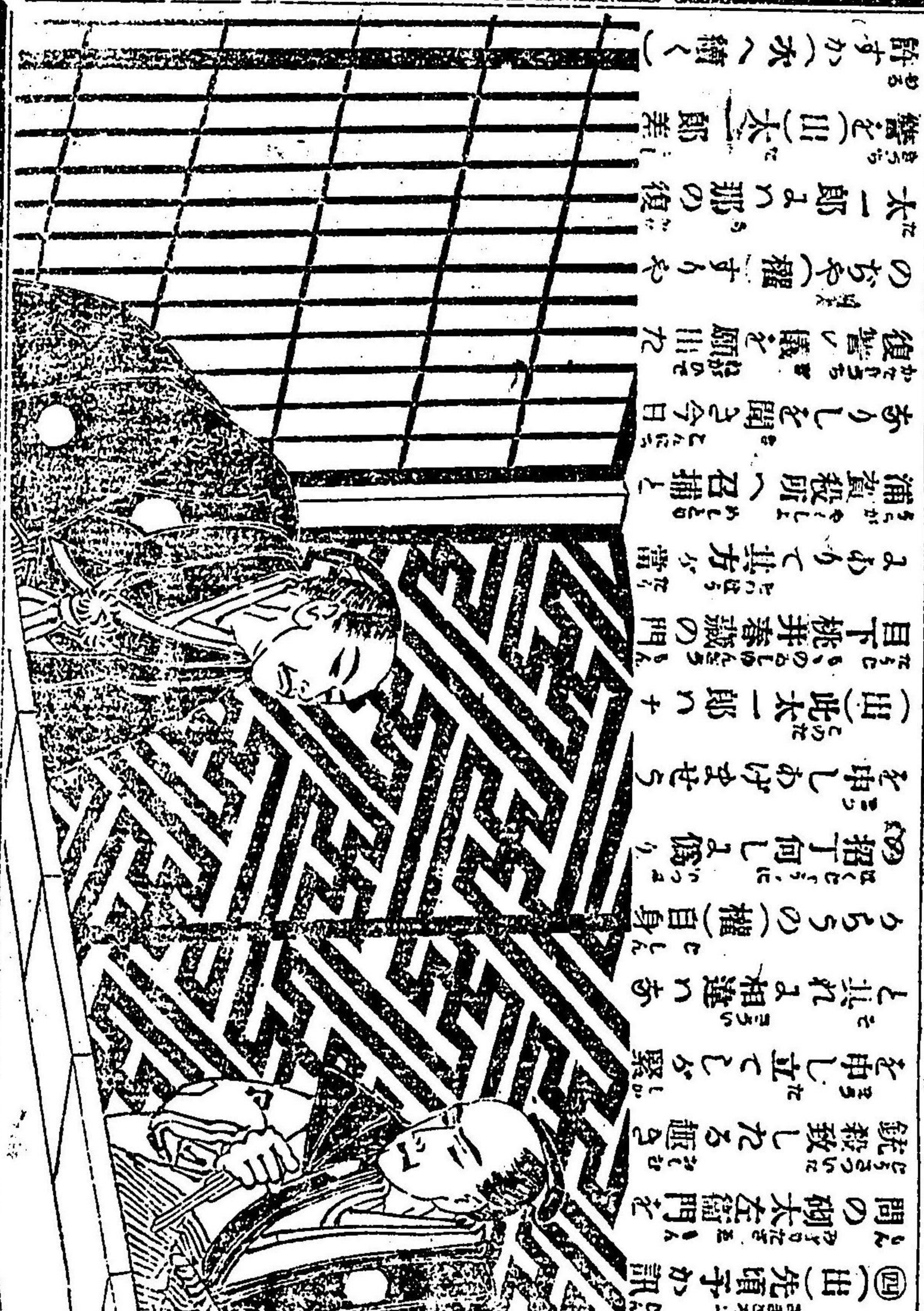
復讐の儀を願出た

のぢや(權)すりや

太一郎よハ那の復

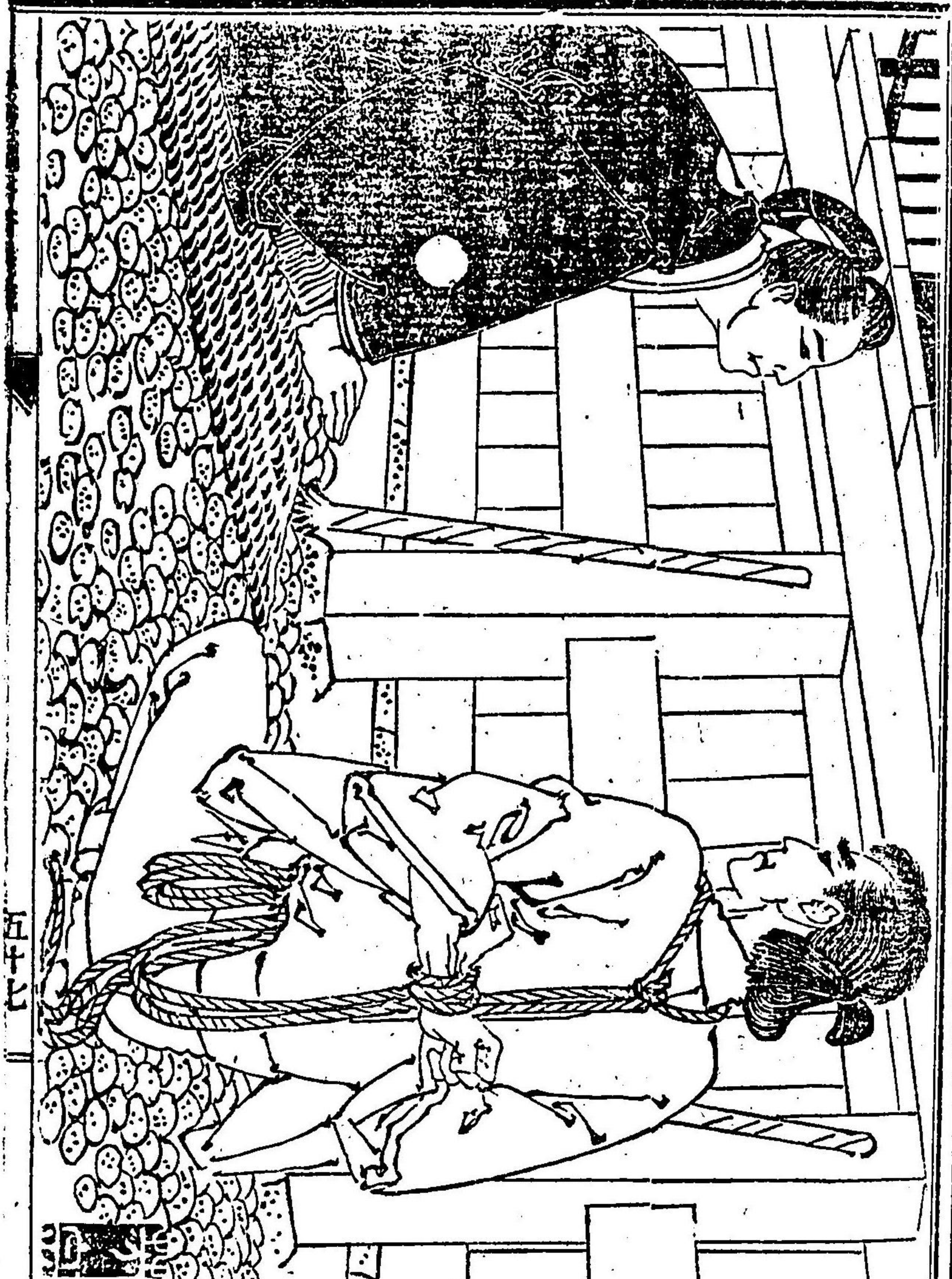
讐を(出)太郎差

許すか(次へ續く)



③する是れハ信州下諏訪伴太左衛門の俸又御座りませう

四十一





(前の續)ら申し分あらば權三郎へ申せ(太)有難く存ト奉つりますヤイ人非人の權三郎科の自白をあす程故一々覺ゆるあらんが能くも父を撃殺せしよな假令天下の御法よて吾一刀が汝の首へ充る事こそあらすとも御奉行の厚意より只一言の怨を述ても父尊靈へ孝養足れり諄々も重悪人メ(權)如何やう申さるゝとも決して無理とい存せぬあり恩ある人と撃殺しまだ其れのみり密通した女を切つて立ち去りし大悪無道の此内海天網洩れず斯の身となり處置の死を竣つ事あれば足下も怨を散せよのし此は迄新入の科人より聞けば足下も知つたる吾儕の同類政五郎事甲州の三五郎も前非を悔み眞土村なる伯母の許にて自殺せしとの話し權三郎の罪重くお手よりつて厄介とあるの重々不屈極る所爲其れもつけても足下の父の仇を斯いふ權三郎と承知ありし如何ある故ぞ(太)オ、其れこそいお京のより其身の慚懺も書添て送りし文も詳しく記せり(權)其れでい乃公が殺した時の最う足下の許へ告げたる後(太)如何も其れゆる小生の直ぐさま岐阜へ立ち越えしなれど最早汝にお京を殺し同地を去つたる後ありし(權)寔に天道の曇りあく誠を照し玉ふゆる廻り循つて足下にまた茲で乃公を遇いせしならん

然りながら此權三郎の關破りの大罪あれば足下が親父の仇なりとも私しの遺恨を散すの難ゆるべしと其れのみ心中察し申す(出)假令自身も手を下さずとも天下の法は處せらるゝうへの亡太左衛門の怨を散すべし最早多辨を費すあり權三郎を牢内へ引け(桃)閣下の厚意により門人太一郎へ満足を與へ拙者も於ても有難く存じ奉つる(太)嗚々父が地下にありて欣び居るで傍座りませうといふ折柄も與力の駈つけ(與力)只今江戸表より判判到着仕りました(出)左様う、コリヤ兩人とも退出致せ(桃)太ハ、

第三十二反

有恙しりバ浦賀奉行土方出雲守の江戸表よりの判判到着せしを以て之を披閱するよ内海權三郎の重罪の者されバ江戸表へ差廻すべしとありけるにぞ早速其準備ありるうへ曾て復讐の儀と願ひ出でし伴太一郎へも此趣きを沙汰せられ此一件の者江戸表へ送りときりし慶應三年夏六月よして是より再び南町奉行に於て礼問ありしが同人が浦賀に於て招丁せし廉も毫も相違なければ遂に同年八月下旬鈴ヶ森に磔の刑に處せられぬ是より先桃井春藏氏より太一郎の事を町奉行へ上申ありしのと元來當時にあつ



て差許さるべきものゝあらねば願意の聽届まならざりしも罪科も重き磔の刑に處せられたる事ゆゑ太左衛門の恨も散し得度しゝるや疑ひなしと稍喜びの色を顯はせり話頭轉題眞土村ある三五郎の情婦お春及び同人の伯母お正より三五郎が最期の砌聽取りて書認めたる一書を添へ是を地頭へ差出し沙汰を俟つ折より慶應四年更まり明治元年の春とあり幕府瓦解引續き代り王政の徳も化し萬事維新の治政を布かれ特し御即位は付き大赦を仰出だされしるは甲の舊惡乙の隱事も全く沙汰せられざるの恩典より此事件も關係し者ども世へ公けは出づるを得ざり然ればお春も伯母どもも横濱に移りて再び三筋の糸も憑り町藝妓とあり稼ぐ折より當時横濱も名も高き某甲も身購され妾とあり其後東京に來りて木挽町ありしが明治七年の頃故ありて同家を辭し今ハ淺草福井町お或者の妻となり以前尖し心の角を折りて誠の道を踏み安かき世を經營居り亦伴太一郎の其素志あらずと雖も桃井師の厚誼より適れの劍客とあり戊辰の際ハ一旦脱走の幕兵も加りしも程なく歸順して官軍とあり此役畢りて後故郷歸り専ら農業の事勉勵し當今ハ長野縣農業委員とあり國益の擴張を企圖すと云へり

亦神田多町にありし傳七夫婦の益々家業も榮繁昌し折りて故郷松坂より家名の事あつさ呼戻しの使來たりしにぞ餘儀なく多町の店をままひ夫婦俱伊勢國へ赴きしハ維明治九年の事ありとか樂天が謂ふ行路の難ハ山もあらず水もあらず只人性反覆のうちありと元此松坂綿の中根の娘おはんが細糸の絹に襦を起せしも中頃木綿糸の太きあらくれさき遷り筆の毛織もあぼるよて其組糸さへ定まらず屑糸のみだれ最と多り爾れども地合の善惡と努す因あり果あるを以て一目おして之を鑑定するハ人皆固有の精神あればあり記者ハ力て善き糸も善き編柄を織らんとすれど未だ智覺の機能あければ蠶の糸の滑りある肌障りよき小袖を閱覽する事難く木綿布子のキヌくと御氣に召さぬも多からんが开は只仕入れの品も寄ると價值相應の涉評判を乞ふ

松坂綿好新機織尾



明治十八年八月六日出版御届  
全年八月二十日 發兌

定價金六拾錢

編輯兼  
出版人

丸山幸次郎

賣捌元

京橋區弓町十二番地

村上眞助

全

淺草區北富坂町十三番地

木村己之吉

東京地本同盟組合



下谷區上野北大門町五番地

大賣捌  
橫山町三丁目  
南鶴町二丁目  
馬喰町二丁目  
尾張町二丁目

辻岡文助  
山屋兵衛  
山口藤兵衛  
上田屋榮二郎

濱町三丁目  
橫山町三丁目  
通三丁目  
南傳馬町一丁目  
藥研堀町

高崎脩助  
鶴屋鐵二郎  
丸屋陽堂  
春丸屋陽堂  
鈴木嘉右衛門

三十三號  
八月廿六日



東 京 圖 書 館

和 書 門

一 冊

八 五 號

七 架

一 函

類

榮





特45  
83

091379-000-2

特43-83

松坂縞好新機織

彩霞園 柳香/著

M18

DBN-2281

